

最古の壺棺再葬墓

——根古屋遺跡の再検討——

設 楽 博 己

-
- | | |
|-------------|---------|
| 1 はじめに | 4 抜歯の分析 |
| 2 根古屋遺跡の概要 | 5 おわりに |
| 3 土器棺の時期と系譜 | |
-

論文要旨

東日本の初期弥生文化を特徴づける墓制は、再葬墓である。再葬は、いったん遺体を土中に埋めたりして骨になるのを待ち、再びそれを埋葬する葬法をさす。この時期、とくに壺棺が蔵骨器として多用されるために、そうした再葬を壺棺再葬の名で呼んでいる。

壺棺再葬墓の葬法や葬墓制に関しては、解決しなくてはならない問題が山積しているが、なかでもその起源を明らかにすることは、もっとも重要な研究課題のひとつである。本稿は、壺棺再葬墓の起源をさぐる基礎作業として、最古の壺棺再葬墓遺跡のひとつと目される福島県根古屋遺跡の土器と抜歯について、その時期と系統を分析した。

その結果、根古屋の土器棺はおおむね大洞A'式と氷I式に並行する時期であることを確認した。そして、体部文様のモチーフの変遷と系統、文様表出手法や器形、地文などの分析から、根古屋の土器は在来の系統の土器に、中部東北地方などの強い影響が加わって成立したものであり、会津地方などの浮線土器も流入しているが、その系統的な区分は比較的明確になされており、晩期の土器のありかたを踏襲していることを明らかにした。しかし、会津地方の技法と、中東北地方以北に顕著な技法のひとつの土器のなかに融合していることや、大洞A、A'式に系譜が求められる大形壺、甕から変化した大形壺の出現など、大形壺をめぐる新たな動きを重視した。

抜歯のありかたも、土器と類似した特徴を示すことを確かめた。すなわち、関東、南東北地方の縄文晩期の抜歯様式を受け継ぎながらも、東海地方の影響で、抜歯過程が変容していることを指摘した。この時期の中部地方は稲作をおこなっていた可能性が議論されており、壺棺再葬墓の成立、西日本系抜歯による在来の抜歯の変容といった大きな文化変容の背景として、生産様式の異なる外来文化の影響を考える必要があること、そしてそれはすでに根古屋遺跡のなかに認められることを、土器と抜歯を通じて予察した。

1. はじめに

東日本の初期弥生文化を特徴づける墓制は、再葬墓である。再葬は、いったん遺体を土中に埋めたりして骨になるのを待ち、再びそれを埋葬する葬法をさす。民族学、民俗学では、こうした葬墓制を複葬制として概括することが多いが、日本列島の原始時代におけるこの葬法の意味するところは、民族学、民俗学が明らかにしてきた内容と一致しているとは限らないので、「再葬」の名で呼んでいる。

東日本の弥生時代の遺構には、複数の土器を埋納した土壙が知られていたが、1963～1964年におこなわれた千葉県天神前遺跡の発掘調査で、土壙の中の細頸壺から成人骨が出土し、はじめてこれが再葬墓であることが確かめられた(杉原ほか 1974)。そうした再葬墓の多くが、壺形土器に人骨を納めて埋葬しているところから、壺棺再葬墓の名がある(石川 1981)。この墓制に用いた土器は、壺に限られるわけではない。したがって、壺棺再葬墓という名は不適切だという意見もあるかもしれないが、土器棺のうち、棺身に使ったと考えられる、総数約1033個の土器のなかで、壺の占める割合は約858個の83%にも達している。また、生産様式の変革期に大形壺を用いた墓制が普及することは、二者の間に何らかの関連性があることを予見させる(石川1987)。したがって、もっとも特徴的な壺棺再葬墓の名で呼ぶのがふさわしいと考える。

この葬墓制については、葬送過程の復元、地理的広がりの変遷などさまざまな分析が必要だが、なかでも起源の問題は重要な課題のひとつである。はたしてこの葬墓制がいかなる社会的背景のなかで生まれ、普遍化していったのかという問題に対しては、個々の遺跡の分析が基礎になることはいうまでもない。福島県根古屋遺跡は遺物の量が豊富な、もっとも古い壺棺再葬墓遺跡のひとつである。すでに発掘調査報告書が刊行され、さまざまな問題について論考されている(梅宮ほか 1986)が、異論もある。そこであらためて土器棺の時期と系譜、抜歯の系統について分析し、壺棺再葬墓形成の歴史を解明する基礎作業のひとつとしたい。

2. 根古屋遺跡の概要

根古屋遺跡は伊達郡霊山町にあり、阿武隈川の支流である石田川によって形成された河岸段丘の最下段に立地する(図1)。1981年に霊山根古屋遺跡調査団が発掘調査したが、その際に約12×4mの調査範囲内から弧状に群集した25基の壺棺再葬墓と、2基の土壙、性格や時期の不明な4基の土坑を検出した(図2)。25基の壺棺再葬墓は、数基～10基ほどが互いに切り合いながらひとつのグループをなし、隣り合うグループとの間にはわずかな空間が存在していた。

壺棺再葬墓は、総数124個体の土器を埋設していたが、棺として用いたと思われるのは約91

個体である。ひとつの墓塚における土器棺の数は、4基の土壌を除いて複数であり、それは2個体から多いもので11個体に及ぶ。37個体の土器棺の中および、土器棺の外から多量の人骨が検出された。それらはすべて焼けており、変形、亀裂が著しいため、報告者は軟部のついた状態で焼かれたことを予測している。骨の総量は約45kgであり、土器棺のなかには約2kg納められ、そのほかは発掘区東北隅に層をなして堆積していた。土器棺の外に層をなした人骨は、その部位別の数から特別の選択や抽出を受けたものではなく、年齢も幼年から老年まで幅広く、性別も男女にへだたりがあるとはみなせない。このなかに抜歯人骨や、穿孔した人骨と歯を認めた。抜歯人骨は合計64個であり、そのうちの3個は土器棺からの出土である。穿孔人骨は8個、穿孔人歯は12個出土した。

根古屋遺跡の再葬土器棺は、壺を中心としながらも比較的多様な器種によって構成されている。報告者はこれらをまず器種別に分類し、胎土、整形、地文などについて分析しているが、もっとも力点をおいているのは、文様の分類とそれにもとづく編年的位置づけの考察である。結論的にいえば、報告者は文様表出技法と文様構図の組み合わせから根古屋の土器を3群にわかれ、1群=大洞A'式前半、2群=大洞A'式後半、3群=青木畑式にそれぞれ比定している。本稿もやはり、器種別分類をおこない、文様表出手法と体部文様を分類し、器種別に年代と系統に焦点をあてて分析する。報告者との見解の相違などは、その際明らかにしよう。つづいて、抜歯の分析をおこなう。

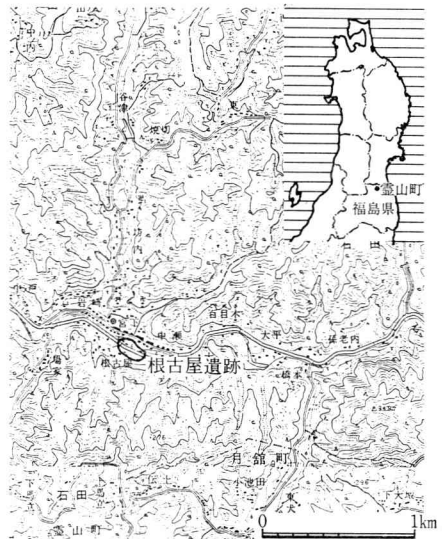


図1 根古屋遺跡の位置

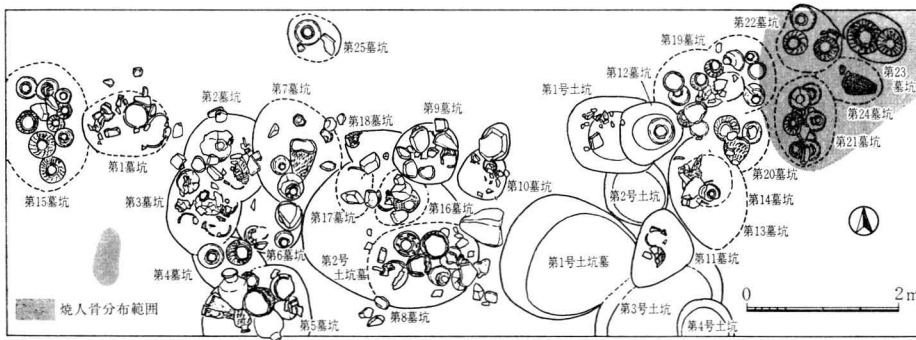


図2 根古屋遺跡の遺構の配置

3. 土器棺の時期と系譜

(1) 器種の分類

根古屋遺跡出土の土器を壺、甕、深鉢、鉢、高杯に分類し、形式ごとに形態的特徴、文様帯のありかたなどでいくつかの器種に細分し、説明を加える。

壺形土器

壺形土器には大形・中形・小形がある。大形壺は30cm以上の高さのものである。高さ20~30cmの中形壺が5個体あるが、いずれも大形壺と同じ形である。小形壺は10cm内外のもので1個体。口縁に小孔があり、独特の形をしている。

大形・中形壺は形態的に2群に大別できる。ひとつは、肩のはりが強く、胴部の最大径が比較的高い位置にある形態の壺、およびその系統のものである。これを「壺」と呼称する。もうひとつは、「広口壺」である。そして、「小形壺」、「台付壺」を加えた4形式を、壺形土器のなかの小形式として分類する。

壺A：短い口縁部は直立ないしやや外反し、肩部は高い位置ではり出し、長い下胴部は直線的に底部に移行する壺を典型とする。これらは、頸部と胴部が文様帯もしくは段で区分されるのを原則とする。口縁部文様帯と胴部文様帯、あるいはそのどちらか一方をもつ一群（A1：図3-1~5・12）と、それらを両方とも欠いて、頸部と胴部の区分がなくなったり、胴部文様帯はもつがきわめて退化したもの（A2：図3-15・16）、口縁部文様帯が帯縄文になったもの（A3：図3-17）がある。A2・A3は総じて肩がなだらかで、胴部最大径がA1にくらべて低い位置にある。

壺B：短い口縁部は直立し、胴部が球形の壺。口縁部、胴部文様帯をもつ（図3-6）。

壺C：口縁部は外反ぎみで、胴部がソロバン玉状をした壺。口縁部文様帯のある一群（C1：図3-8）と平らな口縁で、口縁端部に刻目文をもつ一群（C2：図3-18）、そして小さい文様をもたない一群（C3）がある。

壺D：頸部が胴部から屈曲してやや内傾ぎみに立ち上がり、口縁部がふたたび屈曲して外反する壺（図3-7）。

壺E：形態的には壺Aと変わらず、胴部最大径が高い位置にあるが、頸部と胴部の区画がないもの。口縁部文様帯、胴部文様帯はない（図3-9）。

壺F：きわめて胴が長い、細身の特殊な壺。口頸部は欠失しており不明（図3-14）。

壺G：頸はやや細く、口縁は多少外反する。胴部との境に突帯文をもつが、段による区画や屈曲はない。胴部最大径は高い位置にあるが、細身で下胴部が長い器形の壺（図3-13）。

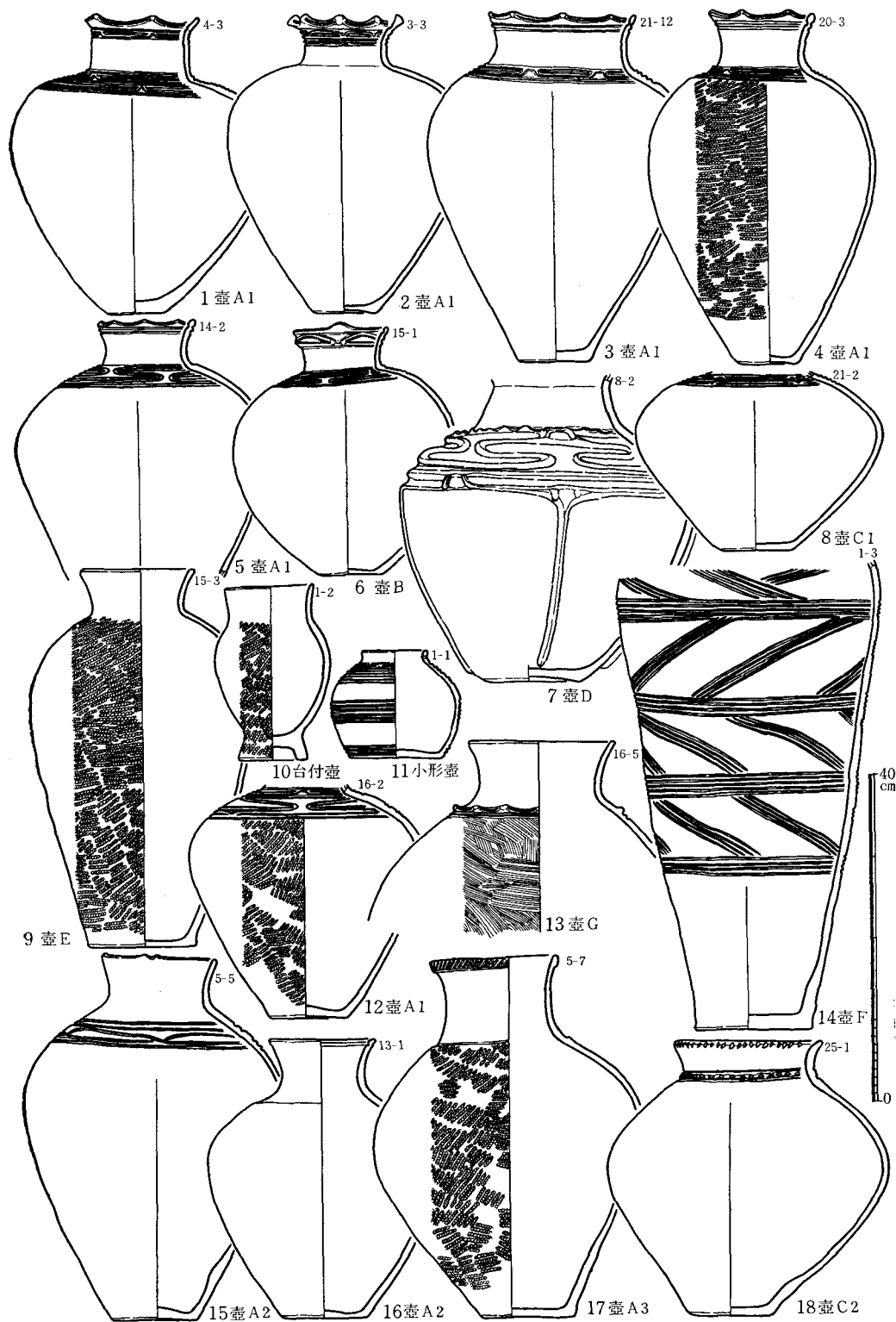


図3 根古屋遺跡出土土器(1) 右肩の数字は土坑No. と土器館No.

広口壺A：短い口縁部がほぼ直立する広口壺。胴部はよく張り、最大径は高い位置にある。口縁部、胴部文様帯をもつ(図4-1)。

広口壺B：短い口縁部は体部からなだらかに直立し、胴部最大径は比較的高い位置にある長胴の壺。口縁に縄文を施文した隆起帯をめぐるす以外は、口縁部、体部などに文様帯をもたない(図4-2)。

広口壺C：広口壺Bと同様の形態であるが、口縁に装飾をもたないもの。文様帯をいっさいもたない(図4-3~6)。

小形壺A：壺Aの口縁を短くし、胴部中央で切断したような形態の壺。体部に3段の文様帯をもつ(図3-11)。

台付壺A：中形の広口壺あるいは甕に台がついたもの。文様帯をもたない(図3-10)。

甕形土器

口縁部が胴部から屈曲ないし屈折して分かれ、胴部のさほど張らない器形を「甕」とする。このなかには、広口壺と区別のつかない形態のものもあるが、こうしたものに対しては系譜の差を考慮に入れて弁別する。

甕A：胴部の上方がゆるやかに内屈し、口縁部が屈折して外反する甕。胴部文様帯をもつ、いわゆる半精製土器である(図4-12)。

甕B：短い口縁が、胴部から屈曲して外反ないし直立する甕。胴部はややふくらみをもち、なかには壺形土器と見まがうものもある。胴部最上位に文様帯ないしは沈線文をもつ。大形と中形がある。大形は文様帯をもたない、いわゆる粗製土器(図4-9)。中形は文様帯をもつ、半精製土器である。胴部文様帯の幅が狭いもの(B1：図4-14)と、広いもの(B2：図4-15)の別がある。

甕C：短い口縁が、長い胴部から屈曲して直立する甕。頸部の最下位、すなわち胴部直上に文様帯をもつ半精製土器である(図4-11)。

甕D：肩にかかるい屈曲をもち、無文で長い口頸部が外反する甕。肩に矢羽根状沈線文の胴部文様帯をもつ半精製土器である(図4-13)。

甕E：胴部がややふくらみ、口縁はゆるく外反する甕。文様帯のない粗製土器(図4-7)。

甕F：頸部でいったん内屈し、さらにゆるやかに直立する口縁をもった甕。文様帯をもたない、粗製土器である(図4-8)。

深鉢形土器

胴部にくびれや屈曲をもたない、深い体部の土器を「深鉢」とする。

深鉢A：口縁が内彎する形態のやや小形の深鉢。胴部がやや彎曲している。曲線による磨消縄文をもつ精製土器。

深鉢B：口縁が内彎する単純な形態の深鉢。文様帯をもたない粗製土器である(図4-16)。

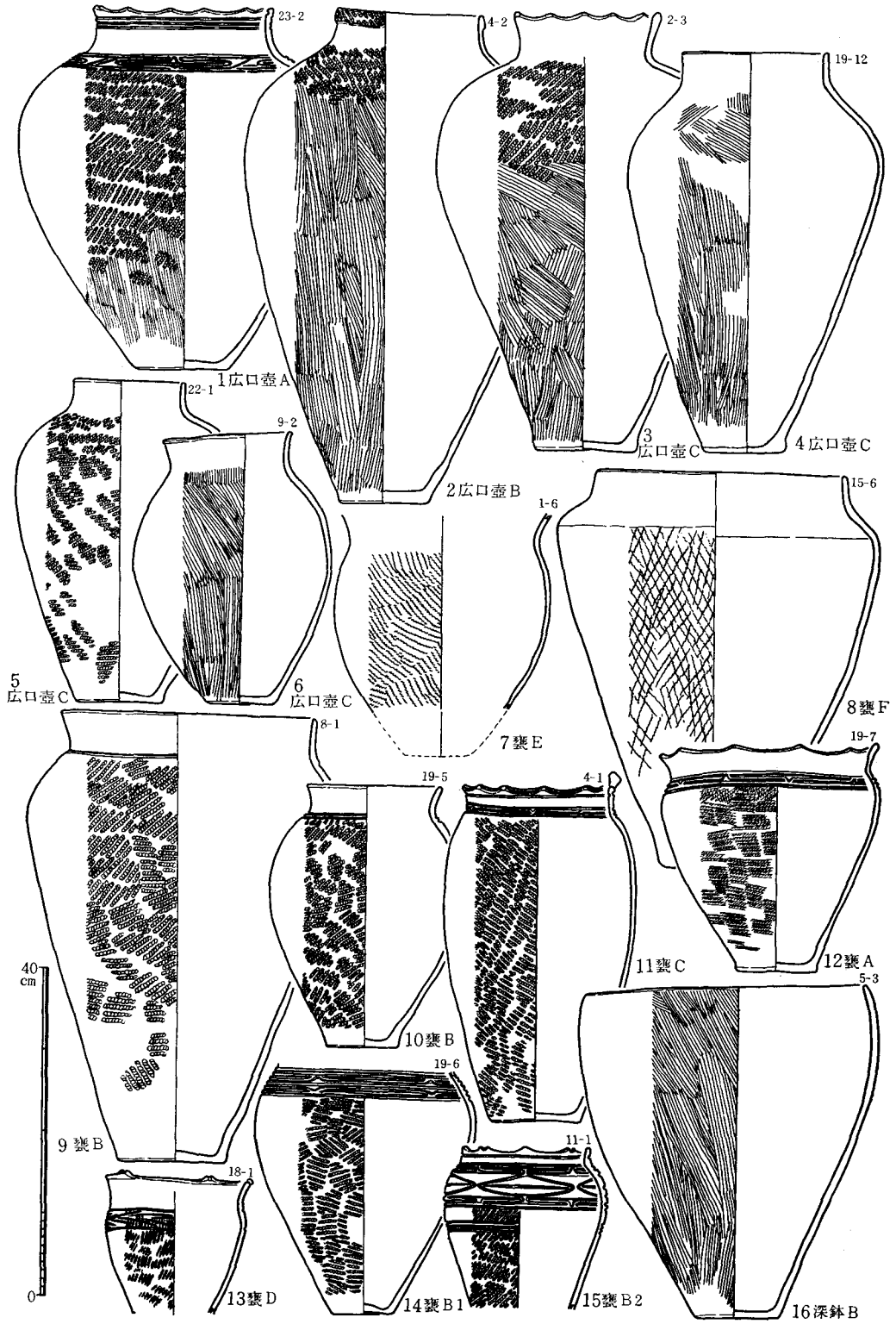


図4 根古屋遺跡出土土器(2)

鉢形土器

口縁径に比して、高さの低い土器を「鉢」とする。

鉢A：やや丸みをおびた胴部から、長い口縁部がかかるく屈折して直立する鉢。口縁に沈線と、肩に胴部文様帯をもつ(図5-1)。

鉢B：底部が丸く、体部は底部付近が外彎、口縁部が内彎する鉢。文様帯をもつことは確かだが、口縁部を欠いており、詳細は不明(図5-2)。

鉢C：胴上部が内彎し、短い口縁部が屈曲して外反する鉢。口縁部文様帯の名残がみられるものもある。胴部文様帯をもつ(図5-3・4)。

鉢D：口縁部が、胴部から屈曲をもって直立する鉢。直立した口縁部分に胴部文様帯をもつもの(D1:図5-5)と、それを欠いたもの(D2:図5-13)がある。

鉢E：口縁部がかかるく内彎する単純な形態の鉢。深いもの、浅いものの別や、ボウル状のものなどの形態上の差もある。胴部文様帯をもつ(図5-6~8・10~12)。

鉢F：口縁部が、かろうじて内彎しつつ開く、単純な形態の鉢。やや深めて胴部文様帯の幅が狭いもの(F1:図5-9)と、浅く文様帯の幅が広いもの(F2:図5-14)がある。

高杯形土器

鉢に脚がついた土器を「高杯」とする。

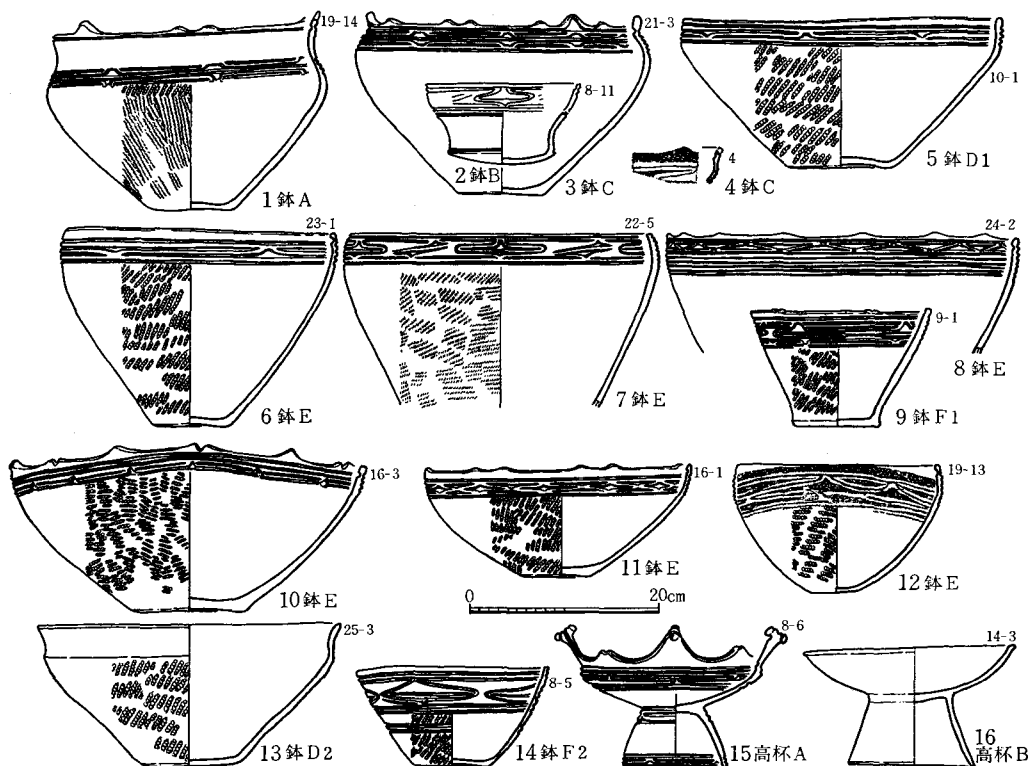


図5 根古屋遺跡出土土器(3)

高杯A：大きな波状口縁の浅い杯部と、やや大きめの内彎する脚をもつ高杯。杯は胴部文様帯を、脚は上下端に文様帯をもつ（図5—15）。

高杯B：浅い皿状の杯部と、大きな台形の脚部をもつ無文の高杯（図5—16）。

蓋形土器

蓋形土器A：外彎する口縁の鉢を伏せたような形態の蓋形土器。曲線による磨消縄文をもつ。

(2) 胴部文様帯の考察

つぎに土器の胴部文様帯の文様類型と表出手法を分類し、その系統と時期について考察する。なお、曲線による磨消縄文を描いた土器を2個体含むが、これらは弥生Ⅱ期に位置づけられ、出土状態も土壌内共伴か否か不明な点があるので除外する。

あらかじめ、文様表出手法を分類しておくとして、①沈線間に生じた隆帯の両端にさらにケズリを加えることにより、隆線部を強調した隆線手法。②削りの部分を幅広くしたり、粘土紐を貼りつけたりすることにより文様を表出した浮線手法。そして③沈線文による沈線手法の3種類（図6）に大別できる（石川 1985, 志賀 1986）。①は隆線の先端はしばしばかまぼこ状に丸くなり、②はとがり、③は扁平になる。胴部文様帯に施した文様には、以下の6類型がある。さらにそれらをモチーフなどによって細別する（表1）。その系統と時期についてもあわせてみていこう。

I類：匹字文系。2条の隆帯の下段に袂りを入れて隆帯をもちあげ、上段の隆帯に接続させることで生じたπ字のようなアクセントを、横方向に配置する。それによってできた長い棒状の文様を横につらねてつくった連続文様およびそのバリエーション。単帯で構成するもの（I—1類）と、隆帯をはさんで、対称的にむき合う、2段構成になるもの（I—2類）、それらの上段の棒状文のなかに1本の隆帯を加えたもの（I—3類）がある。I—1類の溝には、溝底の刺痕（山内 1930）を加えたものがある。I—3類には、匹字の袂りが三角形をなすもの（a）と幅の広い台形状になるもの（b）の別がある（図8）。また、3条の隆帯の真ん中の線を、上下の隆帯と交互に接続させることによりクランク状の匹字文を構成したものもある（I—4類）。

I類は根古屋ではもっとも多くの器種にみられる構図であり、新潟県北部も含めた東北地方のほぼ全域に分布するが、そのなかにも分布の差が指摘できる。I—2～3類は浮線網状文に似た構図をとり、I—3類は宮城県梁瀬浦遺跡（角田市教育委員会 1976）に典型的なように（図7—8・12）、南東北地方でも浮線網状文の主体的分布圏に接した、宮城県南部から福島県東北部を中心として発達した文様モチーフの可能性が高い。こ

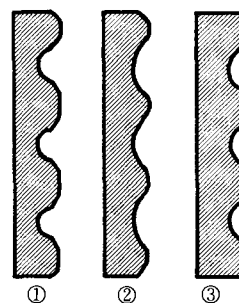


図6 文様表出手法

表1 胴部文様の類型と器種別施文手法

文様 類型	文 様 モ チ ー フ	個 体 数	隆 線 手 法	沈 線 手 法	浮 線 手 法
I-1		8	壺3 (A1・A1・A1)	壺4 (A1・A2・A2・ 広A)・鉢1 (E)	
I-2		9	壺4 (A1・A1・C・ 小壺)・甕1 (B1)	壺1 (A1)・鉢3 (A・B・B)	
I-3		5	壺5 (A1・A1・A1・ A1・A1)		
I-4		8	壺1 (A1)・鉢2 (D・E)	壺1 (C2)・鉢1 (E) ・甕3 (A・C・C)	
II-1		2	壺1 (広A)	鉢1 (E)	
II-2		7	壺1 (A1)・鉢1 (F1)・高坏1	壺2 (A・C1)・ 鉢2 (E・F2)	
II-3		1		壺1 (A)	
II-4		3	壺1 (A1)	壺1 (A1)・甕1 (B2)	
III-1		4	壺4 (A1・A1・A・A)		
III-2		3	壺1 (B)	壺1 (A1)	壺1 (D1)
III-3		1		壺3 (A1)	
IV-1		1	鉢1 (E)		
IV-2		1		鉢1 (E)	
V		2		壺1 (F)・甕1 (D)	

器種に付随する数字は、その個体数。()のなかは細別器種。隆線手法は、沈線手法をとまうこともある。



図7 梁瀬浦遺跡第2層出土土器

れに対して岩手県九年橋遺跡11次調査資料(藤村 1988)にはI-4類は数多くみられるが、I-2~3類はまずみられない。

I類の年代はどのように考えられるだろうか。I-1・2類は福島県一人子遺跡例(馬目ほか 1970)がもっとも古い。宮城県山王田遺跡IV1・m層では第3段階の浮線文(島田ほか 1990)の手法にちかい隆線手法のものが、沈線手法を主体とする変形工字文の大洞A'式と共伴している(須藤 1987)。根古屋遺跡では隆線手法のものと沈線手法のものが等量出土している。とくにI-3類はすべて隆線手法である(表1)。これは、I類が工字文のつよい伝統のもとにあったからにはかならず、浮線文とは分布を接し並行関係にあったことによる。また、I-1類文様を施した壺に、大洞C₂~A式に発達した溝底の刺痕(図8-1a)がみられることは、大洞A式からの距離がそう遠くないことを思わせる。図8-1bは沈線手法で扁平な表現であるが、類例は千葉県荒海貝塚(西村 1974・1975)で出土しており、彼我の年代を指し示している。I-2類は、大洞A'式直後の御代田式では図8-1cのように退化する。沈線手法による根古屋第5墓坑5号土器(図3-15)もこの時期のものである。I-3類のa(図8-2a)は大洞A式に起源があるのに対して、b(図8-2b)はその影響を受けて四字文が主体になる南~中東北地方東部で発達したものであり、本遺跡では後者が大半である。I-4類は山内

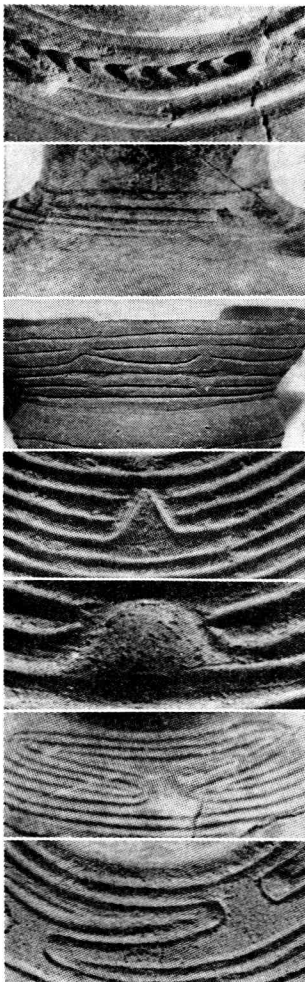


図8 I類文様のバリエーション
(写真上より1a・1b・1c・2a・
2b・3a・3b)

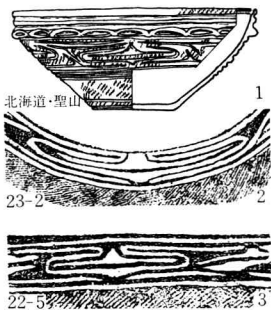


図9 II-1文様の変遷

清男が亀ヶ岡式の文様帯模型図(山内 1930)に、大洞A'式として掲げたモチーフである。このように、I類は大洞A式後半以来の文様帯の狭少化を受けて流行した文様であり、一人子遺跡の年代から大洞A式にさかのぼる可能性はあるが、大洞A'式並行期に流行したものといえる。

II類：入組四字文系。文様帯の上下から四字文をむき合うように削りだし、一方が片方を包み込むようにして形成した、丸みを帯びた菱形ないしは楕円形の単位文とそのバリエーション。III-2・3類が基本線をたどると横方向へ連続して一筆描きできるのに対して、本類はそれが不可能である。単位文の間に2条の斜めの補助線⁽²⁾が加えられるもの(II-1類)と欠落するもの(II-2類)、三角形の部分に水平の補助線が加わったもの(II-3類)、上下の文様帯区画線にπ字文が加えられ、その線から派生した単位文が菱形にちかいもの(II-4類)がある。

II類は大洞C₁式の雲形文がC₂式後半に直線化し、A式にかけて成立した入組工字文(図9-1)に系譜をたどることができ、ほぼ東北地方全域にみられる構図であるが、楕円にちかい単位文は東北東南部に顕著にみられる。II-1類の宮城県梁瀬浦遺跡、浦尻磯坂遺跡(玉川ほか 1986)、福島県道平遺跡(渡辺ほか 1983)例は、根古屋第23墓坑2号土器(図9-2)のように四字の挟りが幅広く、手法も隆線手法と沈線手法が併存するもので彫刻的である。これに対して根古屋第22墓坑5号土器(図9-3)は沈線手法⁽³⁾による。II-2類の古いものは、福島県四十内遺跡20号土坑(鈴木 1985)で、一人子段階の浮線文(鈴木 1985a)やI-4類を施した鉢などに伴って出土した(図10)。下に開く四字の挟りが幅広く彫刻的で、全体に隆線手法が著しく、浮線文との交渉がうかがえる。根古屋の第6墓坑3号土器(図10-8)は、隆線手法はとるものの沈線化が著しく、これより新しい。それに続くものとして、福島県作B遺跡例(馬目ほか 1986: 図10-9)を示したが、根古屋の第19墓坑13号土器(図10-10)やII-3類文様を施した第16墓坑2号土器(図3-12)

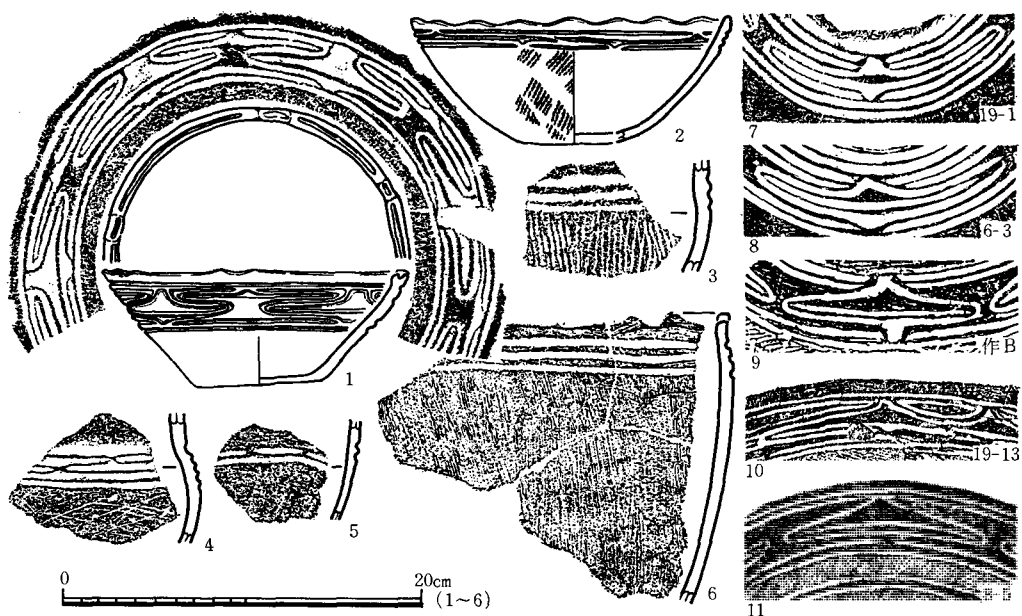


図10 四十内遺跡20号土坑出土土器（1～6）とⅡ-2類文様の変遷（7～11）

は、ほぼこれと同じ時期のものと考えられる。また、根古屋第2墓坑1号土器（図11-1）のⅡ-2類文様は沈線手法で、三角形底辺の匹字文が失われているが、文様帯の幅が狭く、文様モチーフや三角形の頂点の抉り、沈線手法などに東北北部の大洞A'式である青森県牧野Ⅱ遺跡例（弘前大学 1981：図11-2～4）との共通点を見いだすことができる。こ

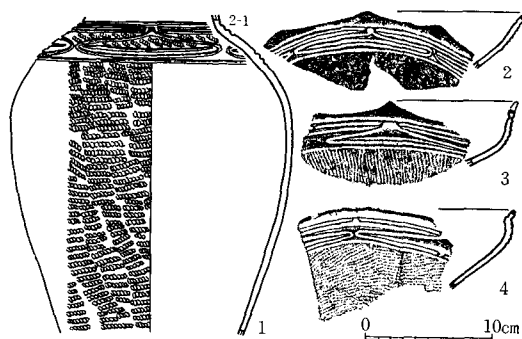


図11 根古屋第2墓坑出土土器(1)と牧野Ⅱ遺跡出土土器(2～4)

うした沈線手法の卓越は、中・北奥の大洞A'式の影響が顕著になったことに原因があるのだろう。Ⅱ-3類はⅢ-2類の影響によって成立したモチーフであり、変形工字文に類似した構図に北奥の影響が如実にあらわれている。こうした結果、大洞A'式直後の青木畑式ではⅡ-1類は消滅し、Ⅱ-2類では彫刻的手法が影をひそめてしまう。第8墓坑5号土器（図10-11）やⅡ-4類文様を施した第11墓坑1号土器（図4-15）の文様は沈線手法によるもので、彫刻的部分はほとんどない。文様帯の幅も広く、胴部には磨消縄文帯が加えられている。こうした特徴は青木畑式と一致する。

Ⅲ類：工字文系。1ないし2本の線を流水状に連ね、工字状の構図を構成したもの、およびその系譜に連なるものである。根古屋ではおおむね3つの類型が認められる。まず、楕円形の

単位文と化した文様を、1ないし2条の隆線をはさんで多段に重ねたものとそのバリエーション(Ⅲ-1類)であり、そのなかには変形工字文にちかいものがある。つぎに、単帯の流水状の横位連続工字文から変化した、三角工字文と呼ばれるものである(Ⅲ-2類)。そして、縦位連続工字文と呼ぶべき、縦に連なる流水状の工字文である(Ⅲ-3類)。

Ⅲ類は、いうまでもなく大洞A式に一般的な工字文から変化したものである。Ⅲ-1類の場合、大洞A式では隣り合う単位文どうしがS字状の線で結合して横に斜めに接続していくが、根古屋例は接合線が欠如し、独立した単位文と化している。このS字状接合線は大洞A'式にはほとんど消滅してしまうか、補助線となり独立していく(中村 1988)と考えられる。Ⅲ-2類の浮線手法(図3-7)は、大洞A'式直後の青木畑式、御代田式、緒立B群にはまったく認められないが、問題は沈線手法のものである。Ⅲ-2・3類は沈線手法ということで青木畑式並行という時期が与えられている(志賀 1986)が、これに関しては異論がある。Ⅲ-2類のうち、沈線手法を用いた文様(図8-3a)は狭い文様帯のなかに巧みに2条の太い沈線で工字文を描き、さらに区画の中に補助線を付け加えている。こうしたモチーフは九年橋遺跡や、青森県沢山1号遺跡(工藤 1987)など、大洞A式からA'式にかけてみられるから、Ⅲ-2類の沈線手法のモチーフは、すでに指摘したⅡ-2類の一部ともども東北北半に系譜を追えるのである。大洞A'式は沈線手法を主体とすることが指摘されている(磯崎 1975)ので、年代を考える際には沈線手法と隆線手法の系譜の違いを考慮すべきである。Ⅲ-3類にもこれに関して言及しなくてはならない点があるので、後節で検討しよう。

Ⅳ類：浮線文系。いわゆる浮線網状文の系統の文様。三角形を横に連ねたもの(Ⅳ-1類)と、S字状の曲線で囲んだ菱形にちかい文様を横に連ねたもの(Ⅳ-2類)の2種類がある。図5-8は隆線手法でこの系統の文様本来の表出手法である。文様帯下部の補助線が数条に及ぶものは、福島県上野尻遺跡(福島県 1964)に類似した例があり、その遺跡の他の土器の特徴と比較すると、浮線文第2段階後半から第3段階前半(石川 1985)に位置づけられよう。図5-11は沈線手法をとる。この構図自体は第2段階から存在するものであるが、文様表出手法などの点から第3段階、つまり浮線文の終末に位置するものとおもわれる。

Ⅴ類：沈線文系。水平方向と斜方向の数条の沈線文を体部に重ねたもの(Ⅳ-1類)と、矢羽根状沈線文を体部に描くもの(Ⅳ-2類)がある。Ⅳ-1類(図3-14)に類する文様は東北地方の壺にみられるが、長野県御射宮司遺跡(百瀬ほか 1982)など、氷I式にもまれに伴う。14をよく観察すると、斜線最下段が折れまがって水平最下段沈線につながり、水平線の下から2段目がクランク状に折れまがって、下から3段目の線につながっている。こうした構図は、大洞A~A'式の三角工字文が沈線文化して乱雑になったもの、単位文間の斜の補助線や波状工字文とも関連をもつものであり、大洞A'式の範疇で理解できる文様であろう。Ⅳ-2類(図4-13)は大洞A~A'式と、会津方面の浮線文土器の半精製甕に系統が求められる。

(3) 根古屋遺跡出土土器の時期と系譜

以上、胴部文様帯の文様類型について、その系統と編年的位置づけについてふれてきた。さきにおこなった器種の分類とあわせて、形式ごとに編年的位置づけを検討しよう。時期を論ずるうえで注意しなくてはならないのは、系統の異なる土器を分けて考える必要があるということである。そのうち、土壌単位で年代的位置づけを検討し、根古屋遺跡の土器棺全体の器種構成と系譜の問題に論及したい。

壺の年代と系譜

壺A～Eは、大洞A式の壺の系統であることは間違いない。それも、頸部が内傾して肩の張りが極度に発達した壺に直接起源が求められるのは、石川日出志や志賀敏行が指摘するとおりである(石川 1984, 志賀 1986)。大洞A式におけるこの型式の壺の体部は研磨されるのが常で、縄文が施されることはない。一方、根古屋の壺A～C・Eには縄文が施されたものがあり、この出自が問題になる。根古屋の壺が大洞A式にくらべて胴下半が長く、縄文が施された壺は比較的なで肩のものが多いことを考えるとき、注目できるのが大洞A式の半精製の甕(図12-17など)、あるいはなで肩で、胴下半がやや長い縄文施文の粗製の壺(図12-19・20)である。壺A～Cは前者に、壺Eは後者に出自が求められるだろう。縄文を地文にもつ壺AやEがなで肩で、一見後出的にみえるのは、その系譜に原因があったと考える。したがって、まず地文の有無で分けて、それぞれ検討するのが妥当である。

無地文のものは、口縁部文様帯と胴部文様帯の特徴で2群に分けられる。壺Aに関していえば、すでに器種分類した壺A1とA2・A3の別である。例外はあるが、口縁端部の装飾の有無、口縁部の文様帯や沈線文の有無が大きな指標になる。A1を第1群、A2・A3を第2群とする。壺B、D、FやCの一部も第1群に属する。

まず、第1群の壺Dは形態や文様など大洞A式の特徴を示しているが、青森県剣吉荒町遺跡⁽⁴⁾(鈴木 1988)に存在しており、のちに述べる根古屋のもっとも古いグループに位置づけられ、その編年上の帰属の判断はむずかしい。壺A1は大洞A式に祖形があるが、口縁の直立するものがほとんどで、頸も太いものが目立つ点に大洞A式との相違がうかがえる。また、胴部文様帯の考察を参照すれば、工字文の影響がつよい隆線手法のⅠ～Ⅲ類文様とつよい結びつきがうかがえ、とくにⅠ-3・Ⅲ-1類に顕著であり(表1)、その年代はほぼ明らかである。Ⅰ-1・2、Ⅱ-2類には沈線化や構図の変化から、第1群のなかでもあたらしい要素のうかがえるものもあるが、新古の区別は明確ではない。沈線手法でⅢ-2類の文様を施した壺A1もいわれるように新しいものでないことはすでに述べた。壺B類はおそらく中～北東北地方からの搬入品であろう。壺Fはきわめて特殊な形態の壺であるが、文様の分析から大洞A'式に並行する時期に位置づけられる。

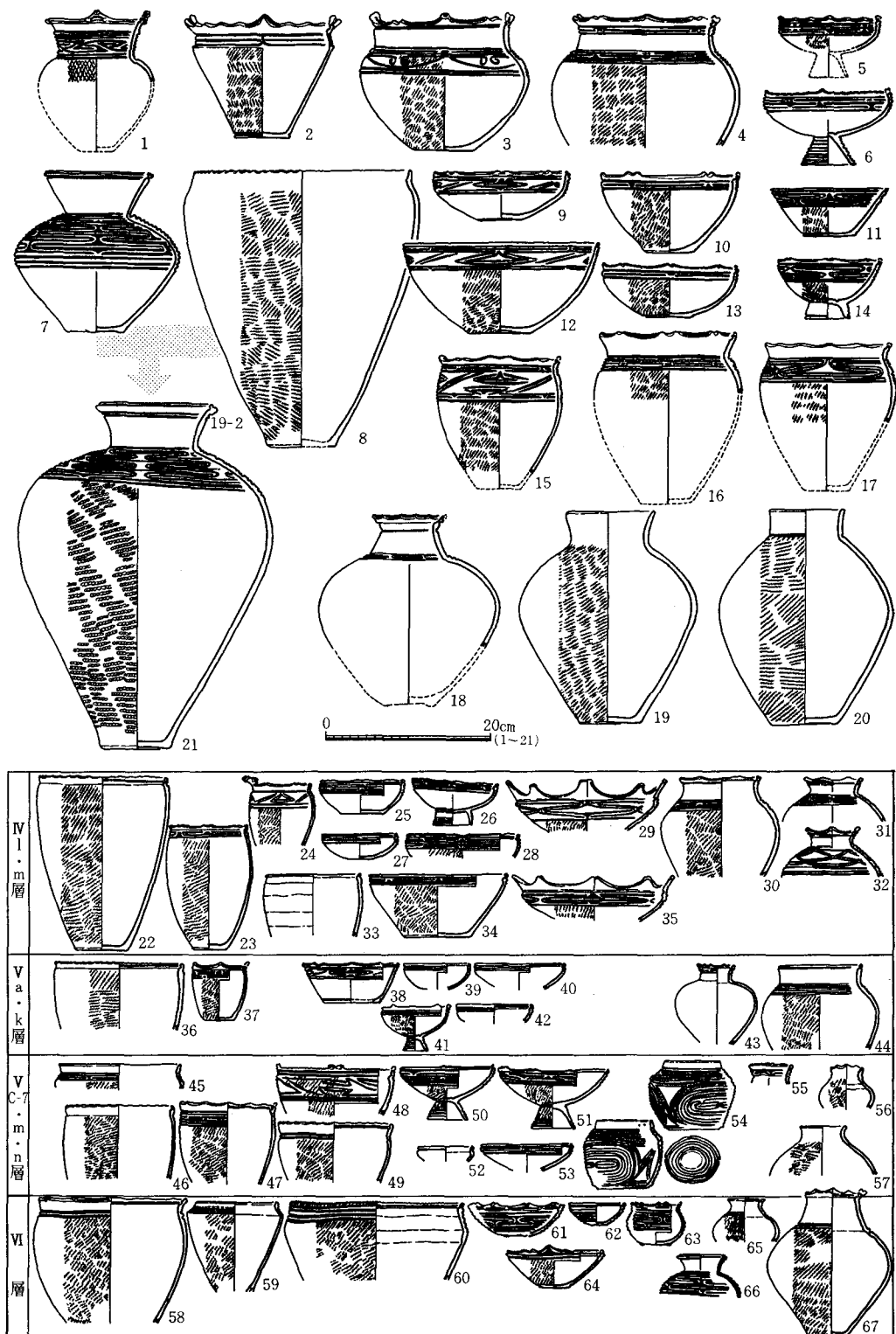


図12 九年橋遺跡 (1~20)・根古屋遺跡第19墓坑 (21)・山王圀遺跡 (22~67) 出土土器

第2群は口縁部文様帯を欠き、胴部最大径の位置が壺A1より低い。これと同じ特徴をもつ土器は、福島県成田遺跡(杉原 1968)や墓料遺跡1号土壙(須藤ほか 1984)などの再葬墓一括資料中にみられる。それらは大洞A'式直後の青木畑式、御代田式に並行するものと考えられており、このことは図3—15に施されたI類文様の年代からも保証される。こうした観点からすれば、壺C3も第2群に含まれる。これは遠賀川式土器の影響を受けた遠賀川系土器(佐原 1987)である。

地文に縄文をもつものでは、他の遺跡との比較から壺A3(図3—17)が第2群に属すと考えられる。他はほとんど第1群に属すとおもわれるが、そのなかに口縁部文様帯をもたない壺Eがあり、無地文の壺における第1群と第2群の区分原則が、この場合にはあてはまらない。これはすでに述べたように、壺Eの系譜に原因があり、縄文地文の壺になで肩のものが多いのもそうした系譜的な問題が背景にあった。したがって、II—2類文様を施した壺A1(図11—1)は、文様の分析から第1群に帰属する。斜回転の縄文が大洞A'式に顕著な特徴だということもこれを支持しよう。さて、ここで棚上げしておいたIII—3類文様を施した壺A1(図12—21)を問題にしなくてはならない。この壺は口縁が大きく外反し、沈線手法で文様を描く。こうした特徴の壺は、大洞A式の比較的小形の壺形土器B(石川 1984: 図12—7)の系譜を引くと考えられるが、縄文を施した長い胴をもつことからすると、壺形土器Bの上半部と縄文施文の甕(図12—8)もしくは長胴壺の胴下半(図12—19)を合体して生み出した大形壺といえる。したがってこれもまた第2群には含まれず、第1群に位置づけられる。

細密条痕(横山 1979)を地文にもつ壺Gは、関東地方の初期壺棺再葬墓にしばしばみられるものであり、第1群でも後半に属するものと考えられる。

次に広口壺を問題にしよう。広口壺Aは、大洞A式の甕のような広口壺(図12—3)に系譜を求めることができる。さきにおこなったII類文様の分析からすれば、図4—1は第1群でも古く位置づけられる。広口壺Bの地文も縄文と細密条痕が融合したもので、福島県下谷ヶ地平C遺跡1号住居跡(芳賀 1986)で、浮線文第2段階に伴ったものをもっとも古い。これは、同県広畑遺跡から出土した広畑型の壺と呼ばれるものであり、会津地方から中通り地方を中心に分布すると予測できる。これらの遺跡のものは、頸部と胴部の間に屈曲がみられ、根古屋の図4—2よりも古い。しかしこのことは、図4—2が浮線文第3段階以降にまで下がることを意味するものではない。下谷ヶ地平1号住居跡は浮線文第2段階でも前半に位置づけられるからである。広口壺Cには甕と区別がつかないものもある。無節縄文を施し、頸部に沈線を加えた第24墓坑1号土器がそれだが、これは先にみた大洞A式の縄文地文の粗製壺のうち、頸部に沈線をめぐらしたもの(図12—20)に系統をたどることができる。細密条痕を施した広口壺Cのなかでは、第17墓坑1号土器のようにきわめて長い胴部をもち条線が粗いものは、無地文のものとともに第2群に属すだろう。図4—4もあるいは第2群か。

甕・深鉢の年代と系譜

甕A・Bの系統と年代を考えるには、九年橋遺跡出土土器が参考になる。甕Aの起源は大洞B-C式の頸部が屈曲する甕で、図4-12は胴部に丸みをもつものの、かろうじて祖形である大洞A式の形態(図12-2)をとどめている。甕B 1は九年橋11次資料中にみられる(図12-15~17)ように胴部が丸く、甕Aの屈曲がとれたものである。根古屋例はいずれも胴部文様帯にI類文様を施し、図4-14は隆線手法で古相を保つ。甕Cの文様帯は頸部下端にあり、これは福島県下の大洞C₂~A式に特徴的な壺(図12-1)の系譜を引くものであろう。文様もI類で古い。甕Dは縄文を施すが、この器種は浮線文土器に伴う甕である。矢羽根状沈線文が乱雑で、浮線文第3段階に位置づけられようか。甕Eは網目状撚糸文を施す。このように第1群の甕はすべて縄文ないしは撚糸文を施し、多くは在来の器種、あるいは中部東北地方からの影響を受けた器種でなりたっている。甕B 2はすでに分析したように、体部文様から第2群に位置づけられる。胴部の磨消文帯の存在もそれを証明している。

深鉢Bの地文は、細密条痕か無文である。浮線文第2段階には、折り返し口縁のこの形態の深鉢が伴うが、根古屋例はいずれも素縁である。型式学的にみれば、新しいものほど最大径が下がったり、口縁部の彎曲が強くなったりする。深鉢Bは、第2群以降に引き継がれる器種である。

鉢・高杯の年代と系譜

鉢形土器の多くは九年橋遺跡11次資料など、中部東北地方に系統的関連性をうかがうことができる。体部の地文が、縄文と撚糸文を併用した鉢A、独特な形態の鉢B、浮線文系の鉢Eの3個体を除いてすべて縄文であることや、口縁内面の沈線文からもそういえる。浮線文を施文したのも、古相の図5-8は体部が無文で会津、北越方面と関連するが、新相の11は体部が縄文であったり、口縁部形態などから大洞A'式に関連性が求められる。しかし、鉢類には在来系譜のI・II類文様のつくものが圧倒的に多く、II-1類文様を施すであろう丸底の独特な鉢Bなど、東北中部以北に対する独自性も指摘できる。4・5・8・9が隆線手法であるほかは、いずれも沈線手法であるが、3は大洞A式に発達した口縁部文様帯の名残をみせ、古い要素をもつ。一方、II-2類文様を施した12は第1群のなかでも相対的に新しく、あるいは第2群に含めたほうがよいのかもしれない。第2群に属するものとしては、14がII-2類文様から青木畑式に比定できる。鉢D 2は西日本の突帯文系鉢の影響を受けたものだとする意見がある。突帯文系の鉢は長野県南部、北部の浮線文土器にしばしばみられるが、北部では浮線文の第1~2段階に伴う(島田ほか 1990)。根古屋例は体部に縄文をもち、第2群に伴うもので、時期的な懸隔から鉢D 1からの変化という考えも成り立つのではないだろうか。判断は保留しておく。

高杯Aは大きな波状口縁に特色がある。これは東北地方北部で、大洞A'式から砂沢式に発

達するものであり、15もこの地方からもたらされたものであろう。高杯Bは類例がなくその位置づけは困難である。

第1・2群土器の編年的位置づけ

第1群土器は壺A1を主体とし、壺B・C1・D・E・F、広口壺A・B・C、小形壺A、台付壺A、甕A・B1・C・D・E・F、深鉢B、鉢A・B・C・D1・E・F1、高杯A・Bによって構成され、壺の胴部文様帯には隆線手法を主体としたI・II・III-1類、沈線手法を伴うII・III-2・III-3類の文様を描き、甕、鉢類は沈線手法を主体に、若干の隆線手法によってI・II・IV・V類の文様を描く。これに対して、第2群土器は壺A2・A3、広口壺Cのあるもの、甕B2、深鉢B、鉢D2・F2によって構成される。大きな特徴は、壺Aの口縁部文様帯が消失し、胴部文様帯もまれに沈線手法でI類がみられるほどに退化している点であり、一般的に壺の文様が失われる傾向がある。そして彫刻手法が一部の匹字文などを残して影をひそめ、全体的に沈線化している。壺Aはいかり肩のものがなくなり、総じてなで肩になる。また、広口壺では肩の張りがすくない長胴のものが現われ、これらに施した細密条痕はふぞろいの傾向がうかがえる。すでに述べたように、I～V類の各文様系列内の文様と手法の変化過程からも第1群土器と第2群土器は識別できる。

第5(図13-C)・11・12・13・17・25墓坑の土器が、第1群を混じえず、第2群だけで構成⁽⁵⁾される。第1群土器を含む第4・19墓坑を切って第2群の第5・12墓坑が営まれ、第14墓坑の上に13墓坑が営まれているのは、第1群土器と第2群土器の年代序列が検証できた貴重な例である。このように編年のうえで明確にできたのは、第1群と第2群土器の区別であろう。これは近年、大洞A'式直後の宮城、福島県における土器様式が、青木畑式、御代田式として明瞭にされつつあることにも負っている。

問題は第1群土器の編年的位置づけである。第1群土器は第2群土器との関係上、大洞A'式に並行する時期に下限があることは推察できるが、むずかしいのはその上限、すなわち大洞A式との関係である。先に、根古屋遺跡出土土器の胴部文様にいくつかの系統があり、それぞれのなかに新古の差があることを予測した。そのうち古いものに関しては、彫刻的隆線手法によるI・II類文様など、文様表出手法やモチーフからは梁瀬浦資料と区別のつかない土器を含んでおり、その編年的位置づけに対して議論が分かれる。つまり、これを大洞A式に並行するものととらえるのか、大洞A'式に並行させて考えるのか、である。

大洞A、A'式の概念の認識は研究者によって異なっている(鈴木 1985a・1987, 志賀 1986, 須藤1987, 中村 1988)が、これは大洞A、A'式が設定された北上川流域の地域で、まず解決すべき問題であろう。その際には、大洞A、A'式が設定された岩手県大洞貝塚に立ち帰ってみる必要がある。中村五郎は、大洞A'地点の土器を再吟味し、これらには新古相があるという重要な指摘をおこなった。この意見に従えば、II+IIc文様帯として山内清男が模

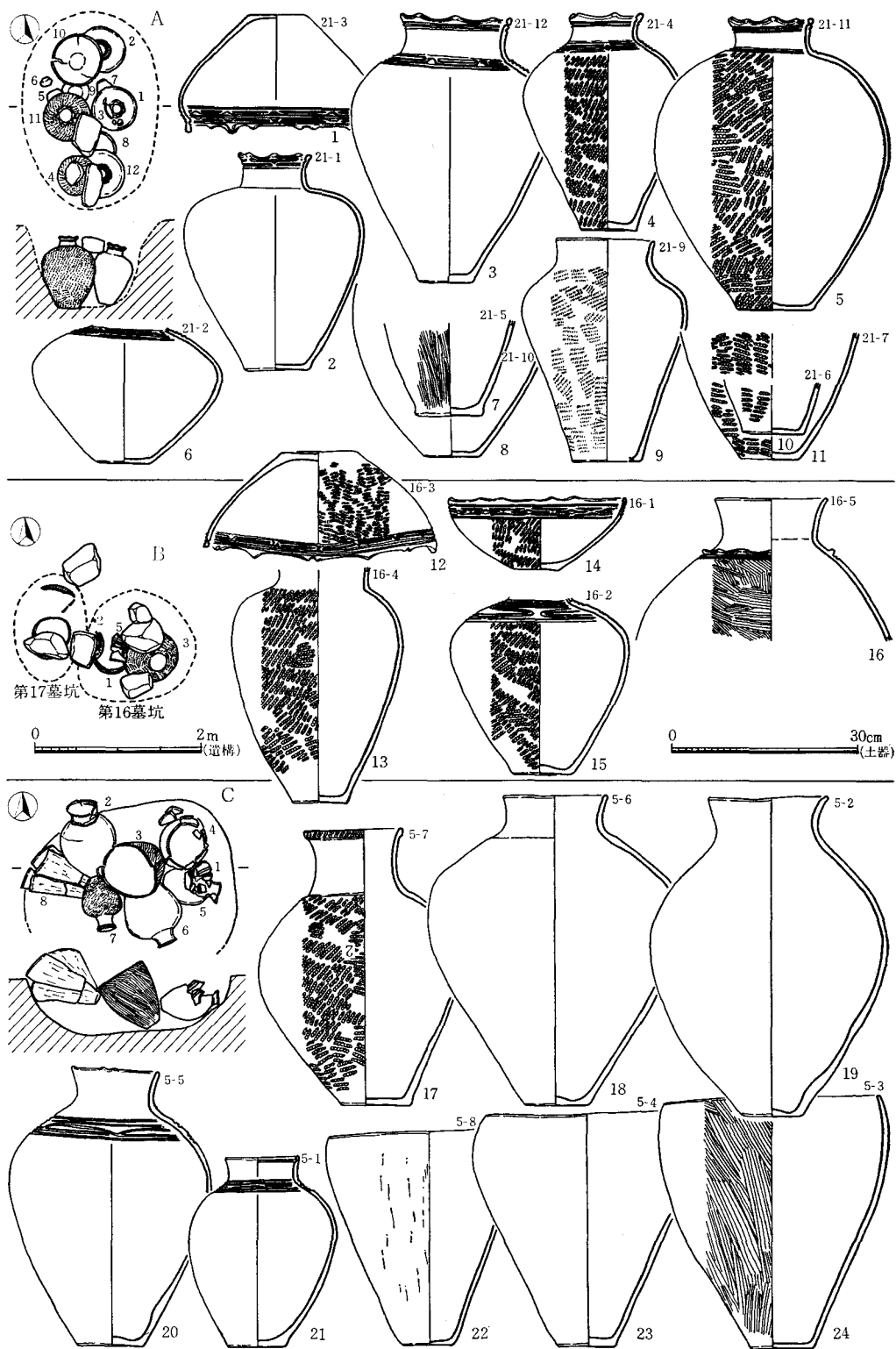


図13 根古屋遺跡第21墓坑(A)・第16墓坑(B)・第5墓坑(C)と出土土器

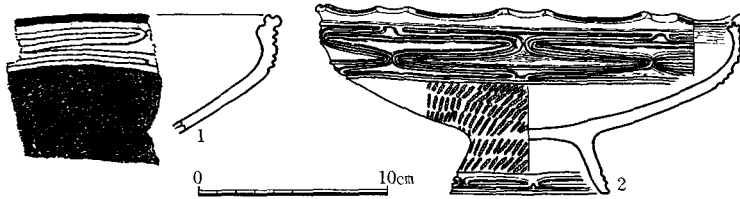


図14 二月田貝塚(1)・大洞貝塚A'地点(2)出土土器

式図に掲げた標本(山内 1930)は文様帯の幅が広がった、A'地点のなかでも新しいもの
だということになる。さらに問題は、A'地点の資料のなかに変形工字文の⁽⁶⁾三角工字文を浮
線手法で描いた台付鉢(図14-2)が存在することであり、それをどう評価するかである。

これと同じ要素を備えた土器(図14-1)は宮城県二月田貝塚(後藤 1972)、青森県剣吉荒
町遺跡(工藤ほか 1984, 鈴木 1988)などに存在する。工藤竹久は彫刻的なII-1類, III-1
類文様を施した剣吉荒町I群土器を、山内が示した文様がないという理由で大洞A式とA'式
の間に位置するものとした(工藤 1987)。これらと同時期と考えられる土器は、九年橋遺跡
第11次資料中に豊富にみられる(図12-4~6・9~17)。九年橋遺跡でまず注目すべきこと
は、鉢や台付鉢に文様帯の幅が狭くなったものが多量に出土していることである。そのほとん
どはIIとIIc文様帯が分離している。しかし、そのなか到大洞A'式のひとつの型式指標であ
る、IIとIIc文様帯の区分が失われる傾向(山内 1930)がわずかではあるが認められること
も確かであるし、山内がかつて大洞A'式の標識として⁽⁷⁾模式図に掲げていた四字文を口縁部にも
つ土器も含んでいる。一方、九年橋の資料には変形工字文をもった大きな波状口縁の高杯が
みあたらない。これに対して宮城県山王厩遺跡IV1・m層(伊東ほか 1985)では、大洞A'
地点出土の変形工字文が施された大波状口縁高杯と瓜二つのものが出土している(図12-29)
ので、九年橋11次→山王厩IV1・m層という序列があたえられる。山王厩遺跡の土器型式が連
続性をもつものであれば、内容的にみても山王IV1・m層の下層であるVa・k層(図12-36~
44)と九年橋11次資料とが並行する可能性が考えられよう。

したがって、大洞A'地点の土器を大洞A'式の指標とするかぎりにおいて、剣吉荒町I群から
始まって、九年橋11次資料の一部、山王厩Va・k層、さらに二月田が大洞A'式のもっとも
古い部分に並行すると考えるか否かは、大洞A'地点の浮線手法による台付鉢をどう理解する
かによって評価が分かれるであろう。⁽⁸⁾その際、東北北部における変形工字文の大波状口縁高
杯の成立過程を、入組四字文や三角工字文の変遷との関係のなかで追究する視点も要求されよ
う。根古屋遺跡とかかわりのふかい梁瀬浦遺跡は、三角工字文や変形工字文が伴わない。しか
しこれには、梁瀬浦遺跡が宮城県でも南部に位置し、大洞A'式の主体的分布圏からははずれ
ているという地域性も考慮する必要があるかとおもわれる。根古屋第1群土器は大部分が大洞
A'式に並行すると考えられるが、上に述べたような問題があるので、ここでは根古屋遺跡の

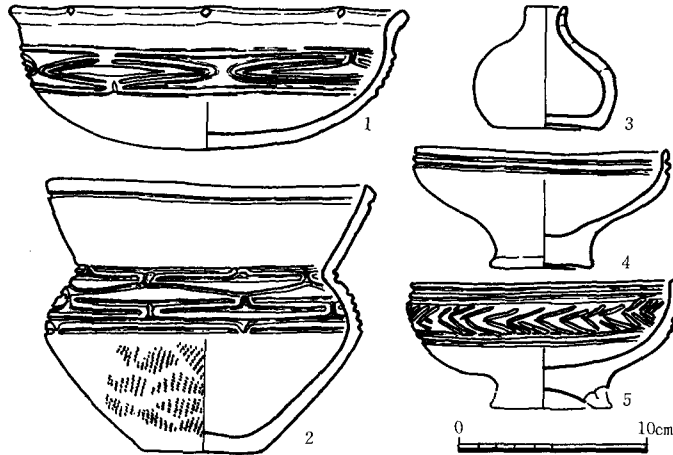


図15 滝ノ口遺跡I区S I 01検出面出土土器

第1群土器で古い要素をもつものは、梁瀬浦段階の土器を含む可能性があると考え、梁瀬浦段階が大洞A式、A'式のいずれに並行するののかという判断は後日を期したい。

第1群土器には浮線文土器が相伴していた。その編年的位置づけについてはすでに述べたとおりである。浮線文土器と大洞A'式に並行する土器との相伴関係を物語る資料としては、福島県滝ノ口遺跡(郡山市 1988, 中沢 1991)をあげることができる。図15が折り重なって出土した一括資料である。1は浮線文の会合点が離れており、規範からははずれているが、氷I式の典型例に比較しうる。2はいわゆる三角連繫文、すなわち関東・中部型の変形工字文(馬目ほか 1970)を施した鉢である。この土器は茨城県女方遺跡34号竪穴出土土器の直前に位置⁽⁶⁾し、大洞A'式の古い段階に並行するものである。器形は胴部のもっとも膨らんだところが角張り、その上に狭い文様帯がつくなど、宮城南部から福島東北部の大洞A'式、あるいはそれに並行する時期の土器と比較できる。氷I式土器をもっと古く考える意見もある(鈴木 1985 a)。また、三角連繫文はもっと新しくみられがちであった(須藤 1976)。異系統土器のたしかかな相伴関係は少ないだけに、滝ノ口例は波紋を投げかけるであろう。

ふたたび根古屋遺跡の土坑ごとの土器のまとまりに戻ると、第1群のみによって構成されるもののなかには、第4・7・9・10・20・21・23・24墓坑のように隆線手法を主体とするI・II・IV類文様の土器だけの墓坑がある(図13-A)。また、第1・2・3・14墓坑なども沈線手法のものを含むとはいえ、その系譜を考えると、決して新しいものではない。これに対して、第6・15・16・19墓坑などには沈線手法による、退化したモチーフを描く土器がかなりまぎって混在していた(図13-B)。これらの土器は、浮線手法と関係をもつ在来の隆線手法が、大洞A'式の沈線手法の影響によって減少し、文様帯のなかに平坦面の占める割合が多くなったもので、第1群でも相対的に新しいものである。しかし、絶対量が少ない土坑一括資料では、たまたま新しい土器が混じることがなかったこともありうる。ことに多数の土器を一括埋納し

た土坑に新しい土器が混じる傾向があり、第8墓坑では第1群でも古い要素をもつ土器群に、第2群の鉢形土器が蓋として共伴していた。壺に隆線手法など古い要素が多く、蓋に用いた鉢に沈線手法など新しい要素が多いのも、墓址という性格を考えれば問題であろう。すなわち、棺として古い要素を残した保守的なものがつくられたということも、ありえないことではないからである。このような問題があるから、第1群における新古に関しては、上述のような傾向を指摘するにとどめておく。⁽¹⁰⁾第1群土器の細別問題は、原則的には新古相が混じらない単純遺跡や、墓址以外の包含層の分層発掘などによって解決すべきであろう。

第1群土器の器種構成と出自

ここでは第1群土器の器種構成を把握したうえで、個々に検討した名器種の系譜を総括し、根古屋遺跡における出現期の壺棺再葬墓がどのような出自の土器によって構成されているのかを考えてみたい。

図16は根古屋遺跡の124個体の土器から、第2群および弥生Ⅱ期の22個体と、細別器種が不明なもの15個体の合計36個体を除いた、第1群土器だけ88個体の器種別構成比率である。これらの土器の用途はすべて明らかにされていないが、骨が入っていたものは蔵骨器として機能していたことは明らかであるし、明確に棺の蓋として用いられたものもある。用途を考慮せずに集計すると、壺Aが40個体(約45%)を占め、形態的に近似する壺B～Eをあわせると、50個体(約57%)と全体の半数以上がいかり肩の壺によって占められている。また、広口壺が10個体(約11%)あり、壺F・G、小形壺、台付壺を加えると62個体(約70%)が壺類によって構成されている。甕、深鉢は12個体(約14%)、高杯を含めた鉢類が14個体(約16%)である。

つぎに用途を類推して集計すると、不明なもの5個体を除いた第1群土器83個体は、壺58個体(約70%、このうち22個体から骨が出土した)、甕・深鉢9個体(11%、このうち4個体から骨が出土した)、⁽¹¹⁾鉢1個体(1%)を棺身として用い、鉢と高杯13個体(約16%)を蓋として用い、壺1個体(1%)を、土器棺の埋納の際のあてがいに利用したものとする。したがって棺身68個体のなかで占める割合は、壺類が約85%、甕・深鉢類が約15%である。壺棺再葬墓成立当初からこのように壺類が棺身の主体を占めていることにはきわめて注目させられる。そしてそれらは図17に示したように器高30cm以上の大形品が多く、奈良県唐古遺跡の土器(末永ほか 1943)と比較すると、長胴のものが目立つ傾向(須藤 1979)が指摘できる。

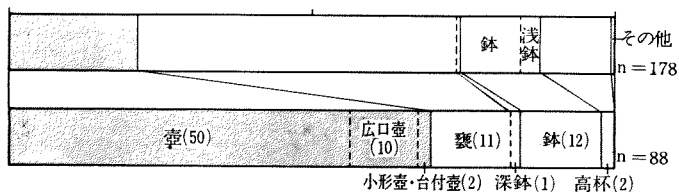


図16 壺棺再葬墓出現期の土器の器種構成
(上: 宮城県館貝塚の大洞A・A'式期の土器, 下: 根古屋遺跡第1群土器)

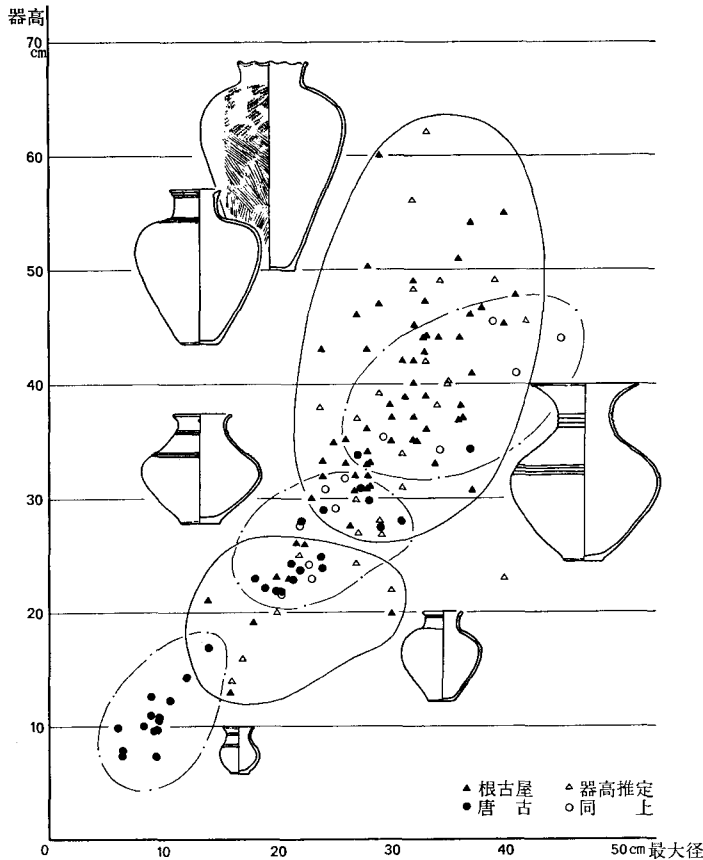


図17 根古屋遺跡と奈良県唐古遺跡出土壺類の法量

壺Aでは、縄文地のもの9個体に対して無文地のものが30個体と3倍以上存在している。大洞A式の壺で頸部に文様帯をもつものは、体部が研磨されるのが常であり、縄文が施されることはない。根古屋遺跡の再葬壺棺の主体である無地文の壺は、大洞A式のいかり肩の壺をそのまま大形にしたものであるという、いわば正統派の大形壺であるために純粋性を保っている。これに対して、この時期にあらたに加わった文様帯をもつ縄文地文の壺形土器には、異形式の融合や系統を異にする壺形土器どうしの融合によって、新たな壺を形成していく変容現象を認めることができる。こうしたいかり肩の無地文、縄文地文の壺には東北中～北部の大洞A'式の影響が強うかがえる。A～Eの系統の壺には地文に細密条痕がまったく見られない点は、この時期にはまだ細密条痕をこの型式の壺に施してはならないという系統区分原理が比較的厳密に働いていたためと考えられる。⁽¹²⁾これらに施された文様は、中～南東北地方東部に在来の工字文、匹字文の流れをくむ隆線手法のものと、中～北東北の影響を受けた沈線手法の三角工字文であり、なかには壺Bのように中～北東北地方から搬入されたとおもわれるものも存在している。

広口壺Aはいずれも縄文地文であり、文様からも中東北～南東北東部の大洞A式並行期の土器に系譜が求められるが、一点、体部下半に細密条痕を施し、その上に肩部まで縄文を施した

これら各器種の系譜であるが、それを考える際には文様要素や器形とともに、地文の区別が有効な手段のひとつになるであろう(鈴木 1987)。つまり、福島県の浜通り地方を含めた中・北東北地方の大洞A～A'式並行期には、無文、縄文地文が卓越する一方、浮線文土器の主体的分布地域である福島県中通り、会津地方では、半精製土器や粗製土器には細密条痕が卓越する(小林 1991)のである。地文の違いに着目して、第1群土器の系譜を総括しよう。

まず、在来ないしは中東北地方の系統を引く要素である。第1群の棺身で主体を占める

ものがあり、系統の融合がいかり肩の壺以外のところからはじまっている点、注目される。縄文地文の広口壺Cは、縄文以外に装飾をもたない大洞A式の壺に系譜が求められる。つまり甕形土器からの影響も無視できないが、壺Eと系統的に深いつながりをもつと考えるのである。甕A～Cは縄文地文であり、型式学的にA・Bが中東北地方の、Cが福島県を中心とした在来の系譜をひくものといえる。鉢類で主体を占めるのもこれと同じく匹字文や入組工字文である。これらが、中～北東北地方の強い影響を受けつつ、在来の大洞A式を母体に成立した土器群である。

そうした系統の土器は壺A～Fが49個体、小形壺、台付壺が2個体、広口壺Aが2個体、広口壺Cのうちの縄文地文のものが5個体、縄文地文の甕が9個体、鉢が9個体、高杯が1個体の77個体(87.5%)と圧倒的多数を占めていることがわかる。

つぎに、浮線文土器群の要素であるが、顕著なのは広口壺と深鉢である。広口壺Aの一部と広口壺Bは、縄文を主体とする大洞A'式と細密条痕を主体とする浮線文土器の融合を示している。細密条痕地文の広口壺Cは鈴木正博が指摘するように、おそらく頸部が無文で胴部に細密条痕をもつ浮線文土器に一般的な甕形土器の頸部をしぼることによって成立したものだろう(鈴木 1987)。東日本における大形壺の成立に関するこうした動向に対しては、東海地方の条痕文土器を分析した佐藤由起男が早く指摘しており(佐藤 1985)、同様な壺形土器の成立過程は信濃地方でも追認することができる(設楽 1991)。浮線文土器群は基本的には在来系譜の壺形土器、すなわち壺をつくる技術をもち合わせていなかったために、粗製土器である甕を容許させて広口壺などの大形壺をつくらざるをえなかったのだろう。壺Gは壺類のなかでは唯一細密条痕調整であるが、肩はなだらかで屈曲がなく、もともとは甕や広口壺の仲間だった⁽¹³⁾のかもかもしれない。

こうした浮線文土器群の系統のものは、壺Gが1個体、広口壺Bが2個体、広口壺Cのうちの細密条痕調整のもの2個体、深鉢1個体、鉢のうちの浮線文を施したもの2個体、そして甕Dを浮線文土器の系統と考えれば、計9個体(10.2%)である。甕Fは福島県には広く分布し、高杯Bはその系譜が明らかでない。以上が、根古屋遺跡の土器群の時期と系譜に関する分析結果である。

4. 抜歯の分析

(1) 根古屋人骨の抜歯型式

根古屋遺跡から出土した人骨の抜歯について分析を試みる。すでにのべてきたように、根古屋遺跡は南東北地方でもっとも古い壺棺再葬墓のひとつであり、人骨の抜歯系統の分析は、この墓制が成立する契機をさぐる基礎作業である。根古屋人骨の抜歯については、すでに飯島義雄による群馬県八東脛洞窟遺跡の抜歯人骨と対比させた分析結果が提出されている(飯島

1988)。本稿はそれを踏まえたうえで、馬場悠男らによる根古屋人骨の抜歯データ(馬場ほか1986)、さらに周辺の同時代、あるいは晩期にさかのぼる抜歯に検討を加え、根古屋人骨抜歯の系統的位置を明らかにしたい。

上顎骨の抜歯

表2は根古屋人骨の抜歯一覧である。この遺跡の性格上、上顎骨と下顎骨が組み合っ⁽¹⁴⁾て出土したものは一例もない。またいずれも残欠であり、上顎骨はすべて縫合で左右に分離している。上顎骨で歯槽の残っているものは右半分が16個体、左半分が15個体で、すべて抜歯している。1個体だけ同一個体に属する左右の上顎骨があり、現存部分に抜歯はないが欠落部分にその可能性が指摘されている。右半分16個体では犬歯と側切歯をともに抜いたものが、不確実な1個体を含めた12個体、犬歯のみの抜去が3個体である。抜歯の有無が不明の1個体(No.35)は、

表2 根古屋人骨の抜歯

上 顎	下顎1類	下顎3類
(1) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (6)	(77) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(55) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(2) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (8)	(64) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(70) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(3) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (14)	(73) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(71) $\overline{4321}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(9) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (17)	(79) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(68) $\overline{4321}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(12) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (20)	(80) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(57) $\overline{4321}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(15) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (36)	(78) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(92) $\overline{4321}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(16) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (38)	(88) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(75) $\overline{4321}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$
(21) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (39)	(72) $\overline{4321}$ $\overline{1234}$	(56) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1234}$
(23) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (4)		(65) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1234}$
(24) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (5)		(69) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1234}$
(19) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{12\textcircled{3}4}$ (18)		(74) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1234}$
(13) $\overline{4\textcircled{3}\Delta 1}$ $\overline{12\Delta 4}$ (29)	下顎2類	下顎4類
(26) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1\textcircled{2}\textcircled{3}4}$ (10)	(61) $\overline{4321}$ $\overline{\textcircled{1}234}$	(60) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}\textcircled{1}}$ $\overline{1234}$
(25) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1\textcircled{2}\textcircled{3}4}$ (22)	(90) $\overline{4321}$ $\overline{\textcircled{1}234}$	(58) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}\textcircled{1}}$ $\overline{1234}$
(28) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}1}$ $\overline{1\textcircled{2}\textcircled{3}4}$ (11)	(62) $\overline{4321}$ $\overline{\textcircled{1}234}$	(63) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}\Delta}$ $\overline{1\textcircled{2}\textcircled{3}4}$
(35) $\overline{4\Delta 21}$	(76) $\overline{432\textcircled{1}}$ $\overline{1234}$	(59) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}\textcircled{1}}$ $\overline{\textcircled{1}2\textcircled{3}4}$
(31-32) $\overline{43\Delta 1}$ $\overline{12\Delta 4}$	(66) $\overline{432\textcircled{1}}$ $\overline{1234}$	下顎5類
	(53) $\overline{432\textcircled{1}}$ $\overline{\textcircled{1}234}$	(51) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}\textcircled{1}}$ $\overline{\textcircled{1}\textcircled{2}34}$
		(52) $\overline{4\textcircled{3}\textcircled{2}\textcircled{1}}$ $\overline{\textcircled{1}234}$
		(54) $\overline{4321}$ $\overline{\textcircled{1}\textcircled{2}\textcircled{3}4}$

() = 顎骨の個体番号、1・2 = 切歯、3 = 犬歯、4 = 第1小臼歯
 — = 歯槽の存在を確認できた部分、
 ○ = 抜歯、△ = 抜歯の可能性あり(馬場ほか1986より作成)

表3 東日本縄文晩期終末～弥生時代の
上顎抜歯

	両側切歯	右側切歯	左側切歯
久保の作遺跡			1
安房神社洞窟遺跡	②	3	1
根古屋遺跡		①・12	3
緒立遺跡		①・3	
熊穴洞穴遺跡		③	1
月明沢遺跡		①	
八束脛遺跡		2	
計	②	⑥・20	6

数字は個体数。○は上顎骨の左右が完全な個体。ただし根古屋の左右が完全な1個体、ならびに右側切歯のうち1個体は、抜歯の有無は不確実。

側切歯は歯槽が欠落して不明だが、犬歯は抜去された可能性があるという。左半分の15個体では犬歯のみの抜去が11個体、犬歯と側切歯の抜去が2個体、側切歯のみの抜去が1個体、犬歯に抜去の可能性のあるもの1個体である。

以上から、次のような傾向を指摘することができよう。まず、犬歯は左右とも抜かれること(15)を原則としていた。そして、確実なもののみを分析の対象にすれば、側切歯の抜去：無抜去は右が11：3に対して左は2：11であり、右側切歯の抜去が卓越していた、ということである。

ここで問題になるのが、左側切歯抜去である。

すなわち、上の比率を左右が相互補完の関係にあると考えて、側切歯抜去はどちらか一方であると考えられるのか、あるいは馬場らがいうように、左右両犬歯の抜去→右側切歯抜去→左側切歯抜去という抜歯の進行段階の違いとして左右側切歯抜去の個体数に差が生じた。つまり最終的には左右の犬歯と側切歯の計4本が抜去されるはずだったのか、という問題である。他の遺跡の例も含めて検討しよう。同時代の抜歯人骨(表3)で上顎が左右そろったものは8例あるが、みな側切歯を1～2本抜いている。そのうち偏側抜去は長野県月明沢遺跡、新潟県緒立遺跡に各1例、根古屋遺跡に1例、岩手県熊穴洞穴遺跡に3例の合計6例で、いずれも右側抜去である。これに対して、両側抜去は千葉県安房神社洞窟遺跡に2例みただけである。そして、左右片方を含めたすべての例を総合すれば、右側が26例、左側が6例、両側が2例と圧倒的に右側が多い。左右完全のものに側切歯を抜いていないものがなく、側切歯を抜いたものは熊穴洞穴例と、根古屋の1例を除いて、いずれも隣の犬歯を抜去している。根古屋では上顎骨はすべて抜歯をおこなっているのに対して、下顎骨は無抜去例があった。このことから、つぎのように結論づけることができる。根古屋人骨の上顎は、両犬歯と右側切歯の抜去が下顎の抜歯に先立っておこなわれた。そして、最終的に左側切歯が抜かれたがそれはまれであった、と。

下顎骨の抜歯

上顎の抜歯が比較的単純な法則をもっていたのに対して、下顎の抜歯は複雑である。下顎骨で歯槽の残っているものは32個体で、これらは大きく5つのグループに分けることができる。それは、1類：抜歯がないもの(8個体)、2類：中切歯だけ抜去しているもの(6個体)、3類：犬歯だけ抜去しているもの(11個体)、4類：犬歯と中切歯を抜去しているもの(4個体)、5類：犬歯、中切歯、側切歯をともに抜去しているもの(3個体)である。

抜歯にかかわる前歯6本が揃った個体をみると、3類は2個体とも両犬歯を抜去したもので

あり、4類でも、3個体中2個体は両犬歯を抜去している。No.60は右犬歯のみの抜去であるが、これは変異と考え、犬歯を抜去したものに関しては、一応両犬歯を抜くことを原則としていたと考える。これに対して中切歯抜去にはそうした原則はあてはまらない。2・4類のうち中切歯のみ左右が揃ったものを取りあげれば、2類は4個体、4類は4個体あるが、そのうち2・4類各1個体ずつが両方とも抜去しているにすぎず、残る6個体はいずれも左右どちらかの片側抜去である。5類は前歯左右6本揃ったものはないが、No.51は左犬歯のみ欠失しているがあとは全部抜去しており、犬歯の抜去原則からして、6本すべて抜去していたことは確実で、残る2例もその可能性が高い。

根古屋人骨の抜歯型式

以上、上顎と下顎に分けてその抜去形態を述べてきたので、つぎに上下顎を合わせた根古屋人骨の抜歯型式を問題にしないでならない。上顎はすべて両犬歯を抜去しているので、側切歯抜去という厄介な問題はあつたが、ひとまずそれを棚上げすれば、下顎の抜歯型式を全体の抜歯型式としてよい。春成秀爾は、縄文時代の抜歯様式を5つに分け、それぞれの様式がいくつかの抜歯型式によって構成されていることを明らかにした(春成 1982 a・1983)。ここでは先におこなった下顎の分類にもとづいて、春成の分類とのすりあわせをおこなう。

1類は無抜去であつた。左右完全なものはないが、左右対称として復元すれば、これは上顎左右犬歯を抜去しただけのO型である。しかし、すでにみたように2・4類の中切歯は片側抜去が卓越していた。したがって、No.77はO型の可能性が高いが、左右の分離したそれ以外は2類に属する可能性もあり、O型とは断定できない。2類は春成の分類にはないものである。すなわち、縄文時代の抜歯にはほとんどなかつた型式であり、I₁型、両側のものは2I型と称すべきものである。3類は先に考えたように、左右対称の可能性が高いので、上下顎左右犬歯を抜去した2C型である。4類は上下顎左右犬歯と下顎中切歯を抜去した2CI₁型、2C2I型である。5類は上下顎左右犬歯と下顎切歯4本を抜いた2C4I型である。春成の4I2C型と抜去歯種と数は同じであるが、こう呼んだ。理由は後述する。

根古屋人骨の抜歯型式とその個体数は、確実O型1個体、O型ないしはI₁型7個体、2I型6個体、2C型11個体、2CI₁型4個体、2C4I型3個体である。そしてそれらの上顎側切歯は、多くは右側、まれに左側あるいは両側を抜去していた、ということになる。

(2) 根古屋人骨の抜歯系譜

根古屋人骨は、遺体ないしは遺骨が火にかけられており、多くは土器棺に納められずに人骨層として堆積していた。これらは遺体処理を経て土器棺に納められたものの残余の骨であり、年齢や性別、部位などから無作為に処置されたものであることが確かめられている。抜歯人骨のほとんどはこうした人骨層からの出土だから、集落構成員全員が再葬されたのだとすれば、

抜歯型式に人為的な抽出などによる偏りは生じていないと考えるのが自然であろう。32個体という数は統計処理には少ない嫌いがあるが、上の個体数の比率はある程度、集落構成員全体の抜歯型式ごとの比率を反映しているところでは考えておこう。そうした前提にたつて、根古屋人骨の抜歯の系譜に考察を加える。その際、東日本の縄文晩期における抜歯と、近年事例の増しつつある弥生時代の抜歯を考慮しながら、縄文時代の伝統的な要素、根古屋などに固有の要素、そして他の地方から伝わった要素に分けて考える。

伝統的要素

抜歯の年代的变化は松本彦七郎、長谷部言人らによる構想(松本 1922, 長谷部 1923など)を、山内清男が縄文土器の編年網のなかに正しく位置づけ、実証した(山内 1937)。つまり、抜歯は九州・吉備地方では下顎中切歯を抜去した I₁様式が縄文前期に、関東・東北地方では上顎側切歯偏側抜去の I₂様式が縄文中期末から後期初頭にはじめてみられるようになる。そして、東北地方後期初頭の上顎側切歯を2本抜く I₂様式両側型式を経て、晩期には東北から吉備にいたる各地に上顎両犬歯を含む多様な抜歯様式が普及する、というものである。さらに、盛行期には下顎切歯抜去を特徴とする東海・吉備地方と、下顎切歯がおおむね健在な関東・東北地方のふたつの地方差を指摘した。そのアウトラインは今日でも訂正の必要はない(渡辺 1966, 春成 1973, 1980 b)が、調査例の増加によってさらに詳しくあとづけられている。

それでは抜歯の意義はどのように考えられているのだろうか。春成秀爾は、つぎのように述べる。縄文時代は基本的に血縁で結ばれた社会であり、族外婚が支配的な婚姻形態だとすれば、婚姻はそうした血縁社会にたえず矛盾をもちこむものである(春成 1973)。したがって、婚入者に対してはなんらかの表示を必要とし、婚入者が以前に所属していた集団との霊的な結合を断ち切るために(春成 1980 a)抜歯は始まったと考えられ、成人儀礼としての抜歯よりも、婚姻に伴う出自抜歯に縄文時代の抜歯の原義がある、と。こうした基本構想が正しければ、⁽¹⁷⁾I₂様式偏側抜歯から両側抜歯を経て縄文後期中～後葉に成立したO型抜歯は、婚姻抜歯とみなすことができる。縄文晩期には、上顎両犬歯を抜去したものが抜歯人骨のほぼ全数をしめることからすれば、これが成人抜歯の意味をもつようになったことは認めてよい。それにかわって、西日本では4 I系と2 C系がほぼ1:1になることから、これが婚姻抜歯になった可能性が高い。春成はO型と2 C型という対立型式が、東日本の婚姻抜歯である可能性を考えているが(春成 1973・1982 b)、山内清男はかつて東日本の下顎の抜歯は晩期に至っても顕著ではないと指摘した(山内 1937)。近年の資料も加えて、東日本のO型と2 C型抜歯の問題を検討してみよう。

表4は東日本における縄文後期末から晩期の抜歯人骨である。下顎の抜歯の有無が判明している人骨を検討すると、中部高地と北陸地方では、合計25体のうち、新潟県寺地遺跡の1体を除いた24体のいずれも下顎犬歯を抜去したものである。下顎の不明な人骨が、長野県に5体

表4 東日本縄文後期末から晩期の抜歯 (文献名は論文末尾に掲載)

— =歯槽の存在を確認できた部分、○ =抜歯

県・遺跡名	人骨番号	性	年齢	抜歯式	時期	
岩手・湧清水	E2-47	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	後期末	
	E1-4	男	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	C-48	女	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E-44	女	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E1-45	?	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E1-46	?	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} 1234$	"	
	E1-1	女	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E-43	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} 1234$	"	
	E2-3	女	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E1-24	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	B-41	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E-34	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E3-30	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E-31	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} 1234$	"	
	A-40	男	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E1-35	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E3-26	男	壮年	$\overline{4321} 1234$	"	
	E3-25	女	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	E1-32	女	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	A-39	女	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
E1-33	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"		
E1-38	女	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"		
静岡・蜷塚	鈴木12号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	後期後葉	
	鈴木7号	男	青年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	鈴木5号	男	20代	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	鈴木4号	女	20代	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	鈴木20号	女	熟年	$\overline{4321} 1234$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	鈴木17号	女	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	清野142号	女	熟年	$\overline{4321} \overline{1234}$ $\overline{4321} \overline{1\textcircled{2}34}$?	
	静岡・西	鈴木1号	男	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	後期後葉
		千葉・荒海	3号	女	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$
	青森・是川	7号	?	?	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	晩期
秋田・柏子所	2号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	晩期	
秋田・柏子所	1号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{1\textcircled{2}34}$	晩期	
	岩手・大洞B地点	長谷部1号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	晩期
長谷部6号		男	壮年	$\overline{4321} 1234$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
C地点		長谷部1号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"
長谷部3号		男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
岩手・下船渡	?	男	?	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1\textcircled{2}34}$	晩期	
岩手・中沢浜	小金井22号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	晩期	
	小金井23号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	小金井26号	女	壮年	$\overline{4321} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	小金井27号	女	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	小金井39号	男	壮年	$\overline{4321} \overline{1234}$ $\overline{4321} \overline{1\textcircled{2}34}$	"	
岩手・細浦	松本?号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	晩期	
岩手・瀬沢	小金井17号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	晩期	
宮城・里浜	松本1号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	晩期	
	松本4号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本15号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本6号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本13号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本11号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本16号	女	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本番外2号	女	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	松本9号	男	熟年	$\overline{43\textcircled{2}1} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
	松本5号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"	
松本番外1号	女	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$	"		
宮城・前浜	?	女	青年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1\textcircled{2}34}$	晩期	
福島・三貫地	1号	男	熟年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	晩期前葉	
	117号	男	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	
	B-12号	女	壮年	$\overline{4\textcircled{3}21} \overline{12\textcircled{3}4}$ $\overline{4321} \overline{1234}$	"	

県・遺跡名	人骨番号	性	年齢	抜歯式	時期
福島・三貫地	125号	女	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	晩期前葉
	B-7号	男	熟年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	25号	女	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	B	女	20代	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	?	男	熟年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
千葉・余山	小金井3号	男	壮年	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	晩期
	小金井9号	男	熟年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井13号	女	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	小金井12号	女	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	千葉・西広	15号	女	壮年	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$
新潟・寺地	1号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	晩期
	2号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
	4号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
	3号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
	5号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
	10号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	12号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	13号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	14号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	16号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	11号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	15号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	17号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	21号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	22号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
23号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"	
長野・保地	?	男	熟年	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	晩期前葉
長野・深町	3号	女	壮年	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	晩期
	4号	男	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
長野・大明神	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	晩期

県・遺跡名	人骨番号	性	年齢	抜歯式	時期
長野・大明神	12体	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	晩期
		?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
長野・野口	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	晩期
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
福島・久保の作	?	女	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	晩期後葉
千葉・荒海	?	女	熟年	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	晩期後葉
千葉・安房神社	小金井3号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	晩期後葉?
	小金井4号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
	小金井6号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
	小金井5号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	小金井1号	男	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	小金井2号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{4321}$	"
	小金井7号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井8号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井10号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井11号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井12号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井13号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井14号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井15号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"
	小金井9号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1234}{4321}$	"

北陸の寺地遺跡に13体あるが、それらのなかにO型が含まれているとしても2C型の数には遠く及ばないであろう。また、中部東北地方ではO型が18体に対して、2C型はわずか4体であり、性別も男性が2～3体、女性が1体である。⁽¹⁸⁾中部高地の場合は、4I系も含めて抜歯の詳細が不明な点が多く、なんともいえないが、中部東北地方では犬歯以外の抜去歯種を含めても、婚姻抜歯といえるような対立型式は見出すことができない。いま、それぞれの抜歯型式の意味するところについて答えることはできないが、中部高地と中東北地方の縄文晩期においては、O型と2C型抜歯が婚姻による出自を表示したものであるとは、まだいえないようにおもふ。⁽¹⁹⁾

これに対して、静岡県蛸塚遺跡を含めた関東、南東北地方では、O型8体、2C型10体とほぼ同じ数であり、O型は千葉県余山遺跡と福島県三貫地遺跡の2体以外6体が男性で、2C型は三貫地の1体以外9体が女性である。O型・2C型の対立構図とO型男性優位、2C型女性優位という法則、すなわちO・2C様式は現在の資料からみる限り、この地方にあてはまることは認めてよいだろう。そしてそれは縄文後期終末から晩期に継続していたのであるから、根古屋遺跡のO型と2C型もその系統を引き継いだものと考えられる。

東日本の縄文晩期終末から弥生時代の抜歯人骨のほとんどに上顎側切歯抜去がみられることは、他の遺跡の例をひいてすでに述べたところである。側切歯抜去で思い浮ぶのは、山口県土井ヶ浜遺跡などにみられる弥生I期の抜歯である。土井ヶ浜の抜歯は、縄文時代のそれを継承したものとする見解が提出されていたが(山内 1964, 渡辺 1966)、春成や中橋孝博は、縄文時代の抜歯型式の伝統を残しながらも、上顎側切歯を抜去したI²系に大陸系抜歯の要素が認められる点を強調している(春成 1974・1987, 中橋 1990)。中橋によれば、土井ヶ浜の側切歯抜去の比率は54%程度であり、39例中27例が両側抜去である。また、犬歯抜去も含めると両側が女性に、偏側が男性にかたより、下顎の抜歯が僅少である。上顎側切歯抜去のありかたや全体的な抜歯様式からみると、根古屋など東日本とは大きく異なっているといわざるをえない。縄文晩期の西日本における上顎側切歯抜去は愛知県吉胡遺跡、岡山県津雲遺跡ともに約2割である。これに対して東北地方では、宮城県里浜遺跡で11体中8体にみられ、同県細浦遺跡、瀬沢遺跡にも認められる。南東北地方では三貫地には認められないが、福島県久保の作遺跡に出現するので、晩期終末には南東北地方に達した。したがって、根古屋の上顎側切歯抜去もこうした系譜と考えたいのである。

固有の要素

縄文晩期の東日本では、下顎は犬歯以外にはほとんど抜歯しない。わずかに4I型、ないしは4I2C型が、中部高地と東北地方にみられるくらいである。この点に関しては後述するとして、それでは根古屋遺跡の下顎中切歯抜去はどのように考えるべきだろうか。このなかには、西日本の2C2I型と同じ型式のものを含んでいる(59号)。西日本の2C2I型は吉胡や津雲などで、全体の1割にみえない程度の存在率であり、春成は2C系の再婚者の型式だと考え

ている（春成 1973）。この解釈が正しいとすれば、根古屋のそれを西日本系にあてることが無理であろう。ここで注目できるのは、根古屋の2類は両側、偏側など抜去方式にバリエーションが豊富だということであり、それが4類の下顎中切歯のバリエーションと類似したものだ、ということである。このことから、 I_1 型、 $2I$ 型がO型からの抜歯の進行系統であり、 $2C$ I_1 型、 $2C2I$ 型が $2C$ 型からの進行系統であることが推測できる。下顎中切歯の抜去の意味を明らかにすることはできないが、 $2C2I$ 型を除いたこれらの型式は縄文晩期の東西日本のどこにも普遍的にはみられないものだから、根古屋遺跡などで固有に発達したものとみなすことができよう。

外来の要素

$2C4I$ 型は、西日本の $4I2C$ 型と見た目は同じである。西日本の $4I2C$ 型は $4I$ 系であり、縄文晩期に $2C$ 系と対になってみられるものである。これに対して東日本では、 $4I$ 系は晩期にはまれにみられるにすぎないが、弥生時代になると顕著になる。表5は弥生時代の東日本の抜歯を集成したものである。下顎全切歯が抜かれた人骨は総数20体であり、この時期の下顎抜歯型式がわかる東日本抜歯総数のうちの約1/3を占める。しかし、ここでひとつ疑問が生じる。それは根古屋をはじめ、新潟県緒立遺跡も7体全部が下顎犬歯を合わせて抜いているように、下顎犬歯を合わせて抜いたものが16体と圧倒的なことである。西日本では、吉胡で $4I$ 型が48体に対して $4I2C$ 型は15体と、約1/3の比率しか占めないことと大きく異なっているのをどう理解すればよいのだろうか。

すでに $2C$ 型の進行形態として $2CI_1$ 型、 $2C2I$ 型が考えられるとしたが、それに下顎

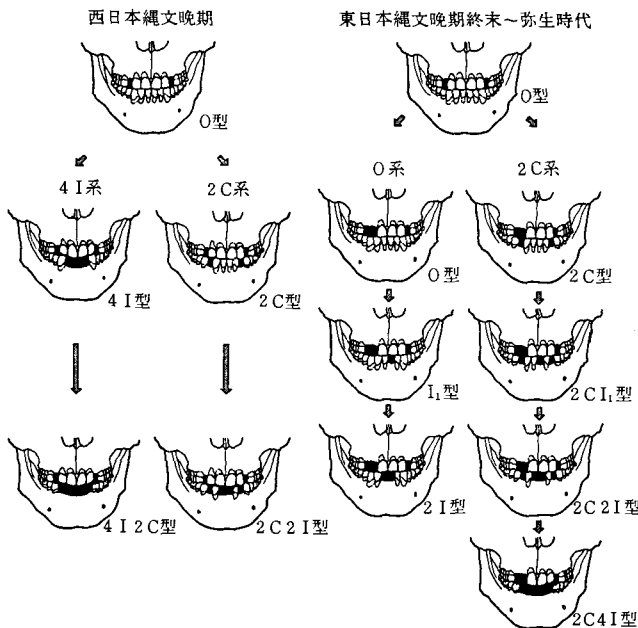


図18 抜歯系列

側切歯抜去が加われば、 $2C4I$ 型が成立する。飯島義雄は根古屋遺跡や群馬県八束脛遺跡の $2C4I$ 型を $2C$ 型あるいは I_1 型からの進行の最終段階としてとらえた（飯島 1988）。私は、根古屋や八束脛のO型と I_1 型、 $2I$ 型をO系に、 $2C$ 型と $2CI_1$ 型、 $2C2I$ 型を $2C$ 系に分離し、それぞれ縄文晩期の関東から南東北地方におけるO系と $2C$ 系の対立構図の延長線上にあるものと理解する（図18）。そして飯島と同じく、 $2C4I$ 型のあるものを $2C$ 型の系

表5 東日本弥生時代の抜歯 (文献名は論文末尾に掲載)

= =歯槽の存在を確認できた部分、○=抜歯

県・遺跡名	人骨番号	性	年齢	抜歯式	時期	
岩手・熊穴	3-1号	男	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	前期?	
	1号	男	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	3-上顎1	?	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	3-上顎3	?	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	3-上顎4	?	壮年	$4321 1\textcircled{2}34$	"	
福島・牡丹平	?	女	壮年	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	前期	
新潟・緒立	7号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	前期	
	10号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	11号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	15号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	4号	?	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	5号	?	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	16号	?	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	17号	?	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	8号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
	9号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
	3号	?	?	$\frac{432\textcircled{1}}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
	1号	?	?	$4321 \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
	2号	?	?	$4321 \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
	13号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} 1234$	"	
	14号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	19号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	12号	?	?	$432\textcircled{1} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
	18号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
長野・月明沢	1号	男	壮年	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	前期	
	2号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
群馬・幕岩	?	?	?	$4321 \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	中期?	
	群馬・岩津保	?	女	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	中期
		?	女	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$?
	群馬・八束脛	1号	男	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	中期?
		2号	女	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
		8号	女	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"
		9号	?	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"
		7号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"
		12号	男	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"
		11号	?	?	$432\textcircled{1} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"
		5号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} 1234$	"
		13号	男	?	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"
		14号	?	?	$432\textcircled{1} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"
		15号	?	?	$\frac{4\textcircled{3}2\textcircled{1}}{4321} 1234$	"
		3号	?	?	$432\textcircled{1} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"
		4号	?	?	$\frac{4321}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"
6号		?	?	$\frac{432\textcircled{1}}{4321} 1234$	"	
10号		?	?	$\frac{432\textcircled{1}}{4321} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
16号		?	?	$432\textcircled{1} \frac{1\textcircled{2}34}{1234}$	"	
富山・大境	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	前~中期	
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} 1234$	"	
	?	?	?	$4321 \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	"	
長野・生仁	?	?	?	$\frac{4\textcircled{3}21}{4321} \frac{12\textcircled{3}4}{1234}$	後期?	

列と考えたい。4 I 2 C型とせずに2 C 4 I型とした所以である。そう考えることによって、縄文晩期には僅少ではあるが東北地方にもみられた4 I型が、なぜ弥生時代の東日本にはほとんどなく、2 C 4 I型がほとんどなのか、という疑問に対する説明が可能になるようにおもわれる。晩期の4 I系は春成も述べるように、東海地方を含めた西日本からの移住者がほとんどだった（春成 1982）のに対して、2 C 4 I型は2 C系列の抜歯進行過程の最終段階だったといえよう。東日本のO系抜歯が身内を、2 C系抜歯が婚入者を表示するものとする解釈が正しいとすれば、2 C 4 I型抜歯もその当初は婚入者を表示したのと考えてよいのかもしれない。

では、なぜこうした抜歯がこの時期を境にみられるようになるのだろうか。これを解く鍵は安房神社洞窟にある。この遺跡の抜歯人骨は4 I 2 C型は1体だけであり、4 I型が10体にのぼる。上顎6個体にはいずれも側切歯の抜去がみられる。この人骨の時期に関しては、長らく古墳時代のものと考えられていたが、春成が弥生中期に引き上げ（春成 1983）、石川日出志は共伴した土器から、縄文晩期後半の五貫森式並行期という見解を唱えた（石川 1988 a）。石川説が正しいければ、房総半島の南端にみられた安房神社洞窟の人々は、東海地方からの移住者であった可能性が高いものとする。そして、当時東北から南下していた上顎側切歯抜去が当地の風習として施行されたのだろう。五貫森式に並行する浮線文土器前半期の関東から南東北地方では、O型と2 C型が流行しており、この時期に関東の一角にそうした人々と風習が入ってきたことに注目したい。そして、それに続く浮線文土器後半期の南東北地方に、下顎の歯に複雑な抜去を施した抜歯様式が出現するのである。

関東、東北地方の縄文晩期の抜歯が下顎にあまり手を加えないことは、山内が古くから指摘していたとおりである。それに引きかえ、縄文時代の終末から弥生時代に、果ては切歯4本を抜くように下顎を目立って抜去するようになるのは、やはり東海地方の影響を考えなくてはならないだろう。2 C 4 I型を、外来系譜に位置づけた理由もここにある。しかし西日本の4 I系との間の大きな違いは、すでに指摘したとおりである。西日本の4 I型抜歯は、ほとんど一挙に下顎の切歯4本が抜去されたのであろう。これはその中間工程を示すものがほとんどみられないことから証明できる。これに対して、根古屋のそれは中切歯抜去から側切歯抜去を経ること、つまり西日本にはない、なんらかの通過儀礼を経ることによって達成された可能性が高い。2 C 4 I型は東海地方からの外来要素とはいっても、2 C I₁型という固有の要素によって、それが関東、南東北的に変容したものといえる。

抜歯の終焉

根古屋遺跡の抜歯が縄文晩期の関東地方から南東北地方にみられた、O系、2 C系の区分原理を踏襲していることは、O系が14個体に対して2 C系が18個体と、ほぼ同様な値を示すことから推察できる。しかし、こうした原則は大洞A'式並行期以降、急速にくずれてゆく。月明沢、緒立、福島県牡丹平遺跡、群馬県岩津保遺跡など事例は少ないが、弥生前期～中期の人骨

の抜歯は100%下顎の4 Iを抜いたものである。⁽²¹⁾もはやO系と2 C系の対立原理もなくなり、いくつかの段階を踏んでなされた4 Iの抜歯も一気になされた可能性が考えられ、抜歯の形骸化が認められる(春成 1987)。そして、やがては神奈川県三浦半島の洞窟遺跡にみるような、O型へと収斂していくのである。

5. おわりに

以上、根古屋遺跡の土器と抜歯について、おもにその年代と系統関係に焦点をあてて分析してきた。土器は第1群と第2群に区分した。第1群については、大洞A/A'式概念が明瞭とはいえないが、現在の、その古い部分の位置づけに問題を残したが、おおむね大洞A'式と氷I式に並行する時期の土器であることを確認した。第1群にも古いグループの土器だけで構成される墓坑と、新しいグループの土器をいくつかまじえて構成される墓坑とがあったが、無理に分離しなかった。しかし、古いグループの土器だけで構成される壺棺再葬墓も存在するので、分離できる可能性も捨てがたい。

根古屋遺跡の壺棺再葬墓は、その成立の当初から大形壺を棺としてさかんに用いる画期的な葬法であった。福島県東北部の大洞A、A'式土器の状況は不明なところが多いが、根古屋遺跡の第1群土器は在来系譜の土器を母体として、中～北東北地方の影響をつよく受けて成立したものだといえる。主流をなしていた壺形土器は大洞A式に伝統のないかり肩の壺であり、壺棺再葬墓成立に際して、身近な土器を採用して大形化したことがわかる。一方、縄文地文の壺には、甕や粗製の壺を大形化して生み出したものを含んでおり、それまでの伝統から逸脱する現象がみられた。また、広口壺や鉢の一部に会津方面の浮線文土器の影響ないしは流入が認められ、縄文地文の広口壺の出現は、そうした浮線文土器群の影響を考えさせる。このように複雑な系統の要素によって、大形壺が生み出されてゆくことにこの時期の意義を認めたい。

しかし、浮線文系土器は墓坑内で在来の土器と共存するものの、在来系あるいは中東北系の土器と、ひとつの土器の中でその要素が融合することは、とくに古い時期にはほとんどなかった。そうした現象が顕著になる、すなわち系統区分原理がゆるむのは根古屋第1群後半以降のことであり、それは会津地方を中心として拡散する現象だと推察される。また、東海系の土器も全く認めることができなかった。したがって、根古屋第1群土器は、大形壺の形成と壺棺再葬墓の成立という画期的な現象を背景として成立した土器である一方、まだ縄文晩期土器の伝統も強かったといえることができる。

抜歯についても同じような結果がでたのは、興味ぶかいことである。つまり、根古屋人骨の抜歯はO系と2 C系に分けることができたが、それは縄文晩期の関東から南東北地方のO・2 C様式を踏襲したものと考えられるのである。しかし、下顎に積極的に手を加えたり、そのな

かに東海系と目される下顎切歯4本を抜去した人骨が認められることは注目に値する。それは全体の割と少なく、なおかつ下顎中切歯抜去というこの地方特有の段階を経て完成された抜歯である。したがって、この抜歯型式は東海地方と直接関係するというよりも、土器の動態からすれば、当時東海地方と頻繁な交渉をおこなっていた信濃地方を中心とする浮線文土器を媒介とした文化伝播の結果だと推測することができる。抜歯のほとんどが4I系になるのは、東海地方とのかかわりがきわめて大きくなったことが引きがねとなったので、それは条痕文土器が関東地方以東へ活発に動く水神平式、すなわち大洞A'式直後と考えられる。根古屋遺跡の時期は土器と抜歯からみると、縄文晩期から弥生時代へと移りかわる中間的な様相を示しているのである。

壺棺再葬墓は、方形周溝墓が流入する以前に、関東、南東北地方で展開していたきわめて独自の墓制であり、それがこの地方の初期弥生文化のひとつの特質であることは、学史に照らしても明らかである。壺棺再葬墓=弥生文化の所産という図式が成り立つか予断を許さないが、この墓制が成立する大洞A/A'式に並行する、浮線文土器の時期の農耕に関する考古学的データには注目すべきものがある。山梨県中道遺跡では氷I式の靱痕土器の胎土中からイネのプラントオパールを検出した(外山 1988, 設楽ほか 1989)。そして、同県宮前遺跡からは、氷I式もしくはそれにつづく水神平式並行期とされる水田跡が出土した(平野ほか 1990)。正式な報告はまだされておらず、時期の比定は今後の課題であるが、いずれにしても縄文晩期終末の会津地方が、中部高地地方と同じ浮線文土器分布圏に属することを考えれば、大洞A'式とそれにつづく時期のこうした動向は注目せざるをえない。

根古屋遺跡の再葬人骨はすべて焼けていた。火葬に類する再葬は、縄文晩期に信濃地方を中心に発達した葬法であり(石川 1988b)、やはり浮線文土器文化の動態がこの時期のいろいろな文化現象を考える際に重要であることを物語っている。本稿は土器と抜歯の分析を中心としたため、再葬に関するさまざまな問題は割愛せざるをえなかった。この点に関しては別稿を用意しているので、参照されたい。

本稿は、筆者に与えられた1991年度文部省科学研究費補助金奨励研究Aによる成果である。

(1991. 7. 1)

謝辞

この論文を執筆するにあたって、赤澤 威、石川日出志、大塚達朗、岡田康博、小林青樹、高田 勝、田多井用章、中沢道彦、仲田茂司、中村五郎、林 謙作、渡辺朋和、東京大学総合資料館、霊山町教育委員会の諸先生、諸氏、諸機関にさまざまな御教示、御高配を賜った。また、春成秀爾先生には抜歯に関する多くの助言をいただき、草稿に目を通していただいた。根古屋遺跡の発掘調査を担当された大竹憲治氏には、根古屋遺跡に対する私の質問に懇切丁寧な回答をいただいた。深く感謝する次第である

註

- (1) 30cmという数がいかなる意味をもつかかわからないが、グルーピングの結果(図17)を重視しておく。
- (2) この補助線は、中村五郎が指摘したように(中村 1988)、工字文の単位文間をつないでいたS字状連結線が沈線化して独立したものだろう。大洞A/A'式の鉢には、文様帯の中に三角形をずらせて上下に向かい合わせ、その間に二本の補助線を入れるものがあるが、この場合は大洞C₂式の深鉢に描かれた、大腿骨文様の退化したモチーフが、大洞A式後半の鉢に導入されたものであろう。
- (3) この文様モチーフの変遷は、鈴木正博が述べるとおりである(鈴木 1985b)。
- (4) 林謙作教示。
- (5) 報告書に掲載された第5墓坑1号土器はⅢ-1類文様を施した壺A1であり、他の第5墓坑出土土器と明らかに時期が異なる。しかしこれは第15墓坑1号とされる、沈線手法でⅠ-1類文様を施したA2類の壺と出土墓坑を取り違えて報告されたことが、第15墓坑の写真図版と第5墓坑の遺構実測図から明らかである。重要な問題なので、この際指摘しておく。
- (6) 典型的な変形工字文(馬目ほか 1970)とは、その構図が細部において異なるが、山王Ⅳa・k層にやや似たものがあるので、変形工字文のバリエーションのひとつだったことには違いない。
- (7) 山内が模式図からこの土器をはずしたいきさつに関しては、型式内容の変更ではなく、文様帯の系統として不適切であったからだとする意見が、飯塚博和によって提出されている(飯塚 1989)が、それに対する反論(鈴木 1991)もある。
- (8) 中村五郎はこの台付鉢を大洞A'式の古い部分とみて、山王Ⅴa・k層と対応させた(中村 1988)。この層からはⅡ-1類文様の鉢が出土しているが、これと並行関係をもつのが中村のいうように、福島県では下谷ヶ地平遺跡を典型とする鳥屋2a式(石川ほか 1988)であるとすれば、これはさらに千網式と並行関係にあるから、千網式が大洞A'式に並行することになる。大洞A/A'式問題に関しては、山内清男の概念規定にはじまり、鈴木正博による大洞A₂式見直し(鈴木 1985a・b・1987)、中村五郎による新たな概念規定などきわめて重大な問題をはらんでいるので、慎重に対応したい。その布石として、大洞A'地点の浮線手法の台付鉢(図14)の位置づけについて若干の私見を述べておく。この土器の文様モチーフは二月田遺跡の三角工字文にもっともよく類似する。しかし、挟られた三角形の底辺が二月田例は直線的だが、大洞は菱形化の兆しがある。つまり、大洞例の場合下部の四字が下にさがることにより、三角形空間の菱形化をうながし、必然的に文様帯も二月田にくらべて若干広くなり、構図ともに山王Ⅳa・k層の大洞A'式にちかづいている。これは重要なことと考える。
- (9) 女方例は文様帯が多段化しており、文様帯も胴部下方にまで広がっているなど、滝ノ口例よりあきらかに新しい。なお私は現在、水Ⅰ式を2ないし3分する腹案を抱いており、水Ⅰ式の終末には浅鉢が激減する長野県石行遺跡(竹原ほか 1987)を当てている。滝ノ口例が水Ⅰ式の典型例だとすれば、女方あるいは群馬県南大塚(大塚 1985)、注連引原(大工原 1987)、さらに水Ⅱ式の標識とされてきた三角連繫文の土器(永峯 1969)は、まだ浮線文が完全には消滅しきっていない段階、すなわち大洞A'式の時間幅のなかに位置づけられる可能性を検討するべきだと思っている。これに関連して、前稿(設楽 1991)で墓料遺跡第1地点の土器(小滝ほか 1981)を大洞A'式直後としたが、大洞A'式並行期と理解すべきだろうか。これに伴った条痕文土器を檜王式でも新しいものと考えることによって、その組み合わせは合理的に理解できるのである。
- (10) しかし、会津地方のほかの遺跡、すなわち岩尾遺跡(中村ほか 1982)、墓料遺跡(須藤ほか 1984)、鳥内遺跡(目黒ほか 1971)などで第1群の古いものの純粋なまとまりをみせる例がいくつか知られているので、大洞A'式並行期の新古の別は、再葬墓においてもとらえうる可能性が高い。
- (11) 鉢のうちの4個体から骨が出土したと報告されているが、これらのうち3個体は明らかに蓋である。
- (12) この系統区分の原則がゆるむのは、福島県においても地方差があった。会津地方では第1群の古い段階においてそのきざしがみえ、第1群後半から第2群の時期には壺Aに細密条痕がさかんに施される。これに対して浜通り地方は、成田遺跡のように第2群の時期にいたってもこの原則に比較的忠実である。これはいうまでもなく、縄文晩期終末の地方差、つまり会津地方は浮線文土器の分布圏であったのに対して、浜通り地方は大洞A式の分布圏であったという差が、そうした原則の崩壊過程に差をもたらしたのである。
- (13) そうした系譜関係を考える際、使用痕の観察が有効な分析視角になること(佐藤 1985)を、稿了後におこなった根古屋土器群の実見によって確認した。これについては稿を改めたい。

- (14) 性の判別ができるものは少ないが、抜歯型式による性のかたよりは認められなかったとされる。
- (15) No.11は犬歯のかわりに側切歯を抜いたものとする。
- (16) 左側切歯を抜いた時期は、安房神社洞窟の両側切歯抜去個体の年齢が鍵となるだろう。
- (17) 春成の構想は当初、縄文時代の居住規定は夫方居住が支配的であるという前提のもとにたてられた(春成 1973)が、その後、抜歯型式の分析結果を最優先して、縄文晩期においては東日本が夫方居住婚優勢、東海・近畿地方では選択居住婚優勢、中国地方では妻方居住婚優勢、九州では妻方居住婚優勢ないしは選択居住婚のと推定するにいたった(春成 1979)。そして、出自規定も東日本では父系的傾向、東海西部では双系的傾向、九州では母系的傾向をもっていたと、見通している(春成 1980 a)。この仮説に対しては、形質人類学の方面から、具体的な若干の疑義(田中ほか 1988)や、民族学から縄文時代が族外婚だけであったとする前提に対する疑問(佐々木 1991)、あるいは土器型式のありかたから、縄文社会を基本的に父方居住優勢とみる見解(谷口 1986)などが提出されている。現在の筆者には、そのいずれが正しいか判断する力量はないが、春成の立論が合葬例の抜歯型式や装身具のありかた、墓地における子供の帰属など考古学の方面の総合的分析から導きだされた解釈であるのに対し、その反論の多くは部分的なものにとどまったり、具体的な考古資料にもとづいたものではない。春成の立論にも非常に零細な資料にもとづくものがあり、その検証には資料の増加をまたねばならないところもあるが、総合的反論が聞かれない現在、春成理論に組して論をすすめたい。
- (18) 岩手県湧清水遺跡は洞窟遺跡であり、後期末とされるが、下顎が判明している人骨は13体すべて2C型である。男性8例、女性5例であり、決してどちらかにかたよってはいない。再葬人骨の可能性があり、出土した土器はわずかなので、春成もいうように(春成 1980 b)、時期比定についてはまだ検討の余地があるようにおもわれる。
- (19) しかし、東北地方のこの時期の出自規定に父系的傾向があることまで否定するものではない。
- (20) 飯島らは、群馬県八束厩遺跡の2C4Ⅰ型抜歯の歯槽閉鎖状況の時間差によって、両犬歯と両側切歯を抜いた2CⅡ型と呼ぶべき形態から、2C4Ⅰ型へと移行した可能性を指摘している(飯島ほか 1986)。
- (21) 弥生Ⅲ期の新段階並行とされる八束厩洞窟例はこの限りではないが、出土した土器が人骨の時期を示すものと考えてよいのか、まだ検討の余地はあろう。

参考文献

- 飯島義雄 1988 「東日本における弥生時代の抜歯についての覚書」『群馬県史研究』第28号 1～13頁。
- 飯島義雄・宮崎重雄・外山和夫 1986 「八束厩洞窟遺跡出土人骨における抜歯の系譜」『群馬県立歴史博物館紀要』第7号 45～74頁。
- 飯塚博和 1989 「「亀ヶ岡式精製土器の文様帯を示す模型図」覚書」『土曜考古』第13号 85～93頁。
- 石川日出志 1981 「三河・尾張における弥生文化の成立—水神平式土器の成立過程について—」『駿台史学』第52号 39～72頁。
- 1984 「岩尾遺跡出土資料の編年的位置と特色」『史館』第16号 71～84頁。
- 1985 「中部地方以西の縄文晩期浮線文土器」『信濃』第37巻第4号 384～401頁。
- 1987 「再葬墓」『弥生文化の研究』第8巻 148～153頁。
- 1988 a 「安房神社洞窟遺跡出土抜歯人骨群の年代について」『利根川』9 1～3頁。
- 1988 b 「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』第74号 84～110頁。
- 石川日出志・阿部朝衛 1988 「鳥屋遺跡の発掘調査(遺構外の出土遺物)」『豊栄市史』資料編1 265～510頁。
- 磯崎正彦 1975 「工字文土器論序説」『大阪学院大学人文自然論叢』1 49～62頁。
- 伊東信雄・須藤 隆編 1985 『山王田遺跡調査図録』宮城県一迫町教育委員会。
- 梅宮 茂・大竹憲治編 1986 『靈山根古屋遺跡の研究』靈山根古屋遺跡調査団。
- 大塚昌彦 1985 「南大塚遺跡」『弥生文化と日高遺跡 第20回企画展—米づくりが社会を変えた』60頁 群馬県立歴史博物館。
- 小田野哲憲 1985 『岩手県東山町熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書』(『岩手県立博物館調査報告書』第1冊) 岩手県立博物館。
- 角田市教育委員会 1976 『梁瀬浦遺跡』(『宮城県角田市文化財調査報告』第1集)。

- 工藤竹久 1987 「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第72巻第4号 39～68頁。
- 工藤竹久ほか 1984 『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』名川町教育委員会。
- 郡山市教育委員会 1988 『滝ノ口遺跡』（『中山地区土地改良共同施行事業関連発掘調査報告書』2）。
- 小金井良精 1933 「安房神社洞窟人骨」『史前学雑誌』第5巻第1号 1～29頁。
- 小滝利意ほか 1981 「昭和54年度の会津若松市の調査」『福島考古』第22号 61～64頁。
- 後藤勝彦 1972 『宮城県七ヶ浜町二月田貝塚（Ⅱ）』宮城県塩釜女子高等学校。
- 小林青樹 1991 「浮線文系土器様式の細密条痕技法」『国学院大学考古学資料館紀要』第7輯 50～64頁。
- 笹川一郎・高橋正志 1983 「人骨」『緒立遺跡発掘調査報告書』96～101頁 黒崎町教育委員会。
- 佐々木高明 1991 『日本史誕生』（『日本の歴史』1）集英社。
- 佐藤由紀男 1985 「静岡県三ヶ日町殿畑遺跡出土の土器について（下）」『古代文化』第37巻第1号 17～26頁。
- 佐原 眞 1987 「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史』中（『岡崎敬先生退官記念論集』）265～291頁。
- 志賀敏行 1986 「遺構内出土土器」『霊山根古屋遺跡の研究』45～76頁 霊山根古屋遺跡調査団。
- 設楽博己 1991 「関東地方の遠賀川系土器」『古文化論叢』（『児島隆人先生喜寿記念論集』）17～48頁。
- 設楽博己・外山秀一・山下孝司 1989 「山梨県中道遺跡出土の靱痕土器」『考古学ジャーナル』第304号 27～30頁。
- 島田哲男・設楽博己 1990 『一律』（『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』）大町市教育委員会。
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』（『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第16冊）。
- 杉原荘介 1968 「福島県成田における小堅穴と出土土器」『考古学集刊』第4巻第2号 19～28頁。
- 杉原荘介・大塚初重 1974 『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』（『明治大学文学部研究报告』第4冊）。
- 鈴木克彦編 1988 『名川町剣吉荒町遺跡（第2地区）発掘調査報告書』（『青森県立郷土館調査報告』第22集 青森県立郷土館）。
- 鈴木正博 1985 a 「「荒海式」生成論序説」『古代探叢』Ⅱ 83～135頁。
 — 1985 b 「弥生式への長い途」『古代』第80号 382～398頁。
 — 1987 「統大洞A₂式考」『古代』第84号 110～133頁。
 — 1991 「栃木「先史土器」研究の課題（二）」『古代』第91号 133～171頁。
- 鈴木雄三 1985 「郡山市における縄文晩期後半から初期弥生にかけての資料一四十内遺跡20号土坑出土遺物と関連する諸資料一」『福島考古』第26号 37～43頁
- 須藤 隆 1976 「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』第23巻第2号 25～50頁。
 — 1979 「東日本における弥生時代初頭の墓制について」『文化』第43巻第1・2号 109～144頁。
 — 1987 「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』第73巻第1号 1～42頁。
- 須藤 隆・田中 敏編 1984 『福島県会津若松市墓料遺跡 1980年度発掘調査報告書』会津若松市教育委員会。
- 大工原 豊 1987 『注連引原遺跡』群馬県安中市教育委員会。
- 竹原 学ほか 1987 『松本市赤木山遺跡群』Ⅱ（『松本市文化財調査報告』No.47）松本市教育委員会。
- 田中良之・土肥直美 1988 「出土人骨の親族関係の推定」『伊川津遺跡』（『渥美町埋蔵文化財調査報告書』4）421～425頁 渥美町教育委員会。
- 谷口康浩 1986 「縄文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」『考古学雑誌』第72巻第2号 1～21頁。
- 玉川一郎・吉田秀享 1987 「浦尻磯坂遺跡の縄文晩期土器と製塩土器」『福島考古』第28号 51～59頁。
- 外山秀一 1988 「中道遺跡から出土した縄文土器のプラント・オパール胎土分析」『帝京大学山梨文化財研究所報』第6号 7頁。
- 中沢道彦 1991 「水式土器をめぐる研究史(1)」『信濃』第43巻第5号 71～89頁。
- 中橋孝博 1990 「土井ヶ浜弥生人の風習抜歯」『人類学雑誌』第98巻第4号 483～505頁。

- 永峯光一 1969 「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』第9号 1～53頁。
- 中村五郎 1988 『弥生文化の曙光』未来社。
- 中村五郎・芳賀英一 1982 「岩尾遺跡の発掘調査」『熱塩加納村史』第1巻 27～44頁 熱塩加納村。
- 西沢寿晃 1982 「中部高地諸遺跡出土の抜歯人骨」『中部高地の考古学』Ⅱ（『大澤和夫会長喜寿記念論文集』）33～46頁 長野県考古学会。
- 西村正衛 1974 「千葉県成田市荒海貝塚（第一次調査）」『早稲田大学教育学部学術研究』第23号 1～56頁。
- 1975 「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）」『早稲田大学教育学部学術研究』第24号 1～28頁。
- 芳賀英一 1986 『下谷ヶ地平B・C遺跡』（『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告』Ⅳ）福島県教育委員会 47～164頁。
- 長谷部言人 1923 「石器時代人の抜歯に就て 第二」『人類学雑誌』第8巻第6号 239～249頁。
- 馬場悠男ほか 1986 「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『霊山根古屋遺跡の研究』93～106頁 霊山根古屋遺跡調査団。
- 春成秀爾 1973 「抜歯の意義(1)―縄文時代の集団関係とその解体過程をめぐって―」『考古学研究』第20巻第2号 25～48頁。
- 1974 「抜歯の意義(2)」『考古学研究』第20巻第3号 41～58頁。
- 1979 「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』第40号 25～63頁。
- 1980 a 「縄文合葬論―縄文後・晩期の出自規定―」『信濃』第32巻第4号 1～35頁。
- 1980 b 「縄文後・晩期の抜歯儀礼と居住規定」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』39～68頁。
- 1982 a 「縄文社会論」『縄文文化の研究』第8巻 223～252頁。
- 1982 b 「抜歯」『日本歴史地図（原始・古代編〈上〉）』131～134頁。
- 1983 「抜歯」『考古遺跡・遺物地名表』423～429頁。
- 1987 「抜歯」『弥生文化の研究』第8巻 79～90頁。
- 平野 修・外山秀一 1990 「弥生前期の水田址」『帝京大学山梨文化財研究所報』第10号 1～3頁。
- 弘前大学考古学研究室 1981 「牧野Ⅱ遺跡の出土遺物について(1)―岩木山麓の縄文時代終末期の土器資料―」『弘前大学考古学研究』第1号 30～45頁。
- 福島県 1964 「上野尻遺跡」『福島県史』第6巻 38頁。
- 藤村東男 1988 『九年橋遺跡第11次調査報告書』（『北上市文化財調査報告』第47集）北上考古学会。
- 松本彦七郎 1920 「二三石器時代遺跡に於ける抜歯風習の有無及様式に就て」『人類学雑誌』第35巻第3・4号 61～83頁。
- 1922 「二三石器時代古式遺跡に於ける抜歯風習に就て」『人類学雑誌』第37巻第8号 243～254頁。
- 馬目順一・古川 猛 1970 『一人子遺跡の研究』（『南奥考古学研究叢書』Ⅰ）。
- 馬目順一・猪狩忠雄 1986 「弥生土器の変遷」『いわき市史』第1巻 187～201頁 いわき市。
- 目黒吉明・柴田俊彰編 1971 『福島県石川町鳥内遺跡発掘調査概報』石川町教育委員会。
- 百瀬長秀ほか 1982 『御射宮司遺跡』（『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市その5―』）長野県教育委員会。
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 139～157頁。
- 1937 「日本先史時代に於ける抜歯風習の系統」『先史考古学』第1巻第2号 53～60頁。
- 1964 「縄文式以後の文化」『日本原始美術』1 144～147頁。
- 横山浩一 1979 「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第24号 223～245頁。
- 渡辺一雄・大竹憲治編 1983 『道平遺跡の研究』福島県大熊町教育委員会。
- 渡辺 誠 1966 「縄文文化における抜歯風習の研究」『古代学』第12巻第4号 173～201頁。
- 1967 「日本の抜歯風習と周辺地域との関係」『考古学ジャーナル』第10号 17～21頁。

抜歯関係文献（No. は表14・15の遺跡順）

- ①小片 保・森本岩太郎ほか 1973 「出土人骨とその問題点」『湧清水洞穴遺跡』佳田町教育委員会。
- ②鈴木 尚 1962 「蜷塚人骨の総合的所見」『蜷塚遺跡』総括編 浜松市教育委員会。

- 平井 隆 1928 「静岡県浜名郡入野村字蜷塚貝塚より発掘せる三頭蓋骨について」『人類学雑誌』第43巻第5号。
- ③鈴木 尚・佐倉 朔・遠藤萬里 1961 「人骨の調査」『西貝塚』磐田市教育委員会。
- ④大久保 進 1965 「関東における縄文式最後の貝塚一埋葬人骨」『科学読売』第17巻第10号。
- ⑤小片 保・森沢佐歳・行方 勝 「人骨概報」『是川中居遺跡地内発掘調査概要』八戸市教育委員会。
- ⑥鈴木 尚・北条暉幸 1966 「柏子所貝塚の人骨」『柏子所貝塚』(『秋田県文化財調査報告』第8集) 秋田県教育委員会。
- ⑦長谷部言人 1925 「陸前大洞貝塚調査所見」『人類学雑誌』第40巻第10号。
- ⑧渡辺 誠1966文献。
- ⑨小金井良精 1918 「日本石器時代人に上犬歯を抜き去る風習ありしことに就て」『人類学雑誌』第33巻第2号。
- ⑩長谷部言人 1919 「上顎外切歯を欠く貝塚頭蓋」『人類学雑誌』第34巻第8号。
松本彦七郎1922文献。
- ⑪小金井良精 1918 「日本石器時代人に上犬歯を抜き去る風習ありしことに就て」『人類学雑誌』第33巻第2号。
- ⑫松本彦七郎 1920 「二三石器時代遺跡に於ける抜歯風習の有無及様式に就て」『人類学雑誌』第35巻第3・4号。
- ⑬百々幸雄 1979 「宮城県本吉郡本吉町前浜貝塚出土人骨」『前浜貝塚』(『本吉町埋蔵文化財調査報告書』第2集) 本吉町教育委員会。
- ⑭鈴木隆雄 1988 「頭蓋」『三貫地貝塚』(『福島県立博物館調査報告』第17集) 福島県立博物館。
- ⑮小金井良精 1918 「日本石器時代人に上犬歯を抜き去る風習ありしことに就て」『人類学雑誌』第33巻第2号。
- ⑯森本岩太郎・小片丘彦ほか 1977 「人骨の形質について」『西広貝塚』早稲田大学出版部。
- ⑰森沢佐歳・松田健史・小片 保 1987 「寺地遺跡(配石遺構)出土の人焼骨について」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町。
- ⑱関 孝一 1965 「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号。
- ⑲・⑳・㉑西沢1982文献。
- ㉒渡辺 誠1967文献。
- ㉓上掲④文献。
- ㉔小金井良精1933文献。
- ㉕小田野1985文献。
- ㉖永山倉造 1979 「牡丹平遺跡」『日本考古学年報』第30号。
- ㉗笹川ほか1983文献。
- ㉘西沢1982文献。
- ㉙飯島ほか1986文献。
- ㉚小泉清隆・今村啓爾 1983 「群馬県岩津保洞窟遺跡出土の弥生時代人骨について」『人類学雑誌』第91巻第2号。
- ㉛飯島ほか1986文献。
- ㉜小金井良精 1919 「日本石器時代人の歯牙を變形する風習に就て」『人類学雑誌』第34巻第11・12号。
- ㉝西沢1982文献。

挿図出典文献

図7：角田市教育委員会1976文献。図8—5：目黒ほか1971文献。図9—1：飯島義雄1989「体部文様からみた「聖山式土器」」『考古学論叢』Ⅱ 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会。図10—1～6：鈴木1985文献。図10—9：馬目ほか1986文献。図11—2～4：弘前大学1981文献。図12—1～20：藤村1988文献など。図12—22～67：伊東ほか1985文献。図14—1：後藤1972文献。図14—2：設楽原図。図15：郡山市教育委員会1988文献。図18：春成秀爾1990『弥生時代の始まり』(『UP考古学選書』11) 東京大学出版会を改変。それ以外は、梅宮ほか1986文献を改変。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

THE OLDEST REBURIAL GRAVE WITH FUNERARY URN
—Reexamination of the Negoya Site—

SHITARA Hiromi

The funeral system which characterizes the early Yayoi culture in eastern Japan is the reburial grave. This is a funeral method in which the body was temporarily buried in the earth and then reburied after ossification. Funerary urns were so frequently used as mortuary receptacles in this period that this type of grave is called a "reburial grave with funerary urn".

Many problems await solution regarding the reburial graves with funerary urns. In particular, clarification of its origin is one of the most important subjects of study. As a preliminary work in the investigation of the origin of reburial graves with funerary urns, this paper analyzes the period and types of earthenware and the custom of tooth extraction at the Negoya site in Fukushima Prefecture, a site which is regarded as one of the oldest for reburial graves with funerary urns.

As a result, it was proved that the earthen funerary urns of Negoya are mostly of the period corresponding to the Ōbora A' type and the Kōri I type of the final Jōmon period. By analyzing the transition and types of motifs of the patterns on the earthenware, the method of pattern expression, the shapes of the urn and the ground patterns, it was found that the earthenware in the Negoya site was based on the local earthenware under the strong influence of the Middle Tōhoku and Aizu Districts, and that it remained the tradition of earthenware of the final Jōmon period. On the other hand, our attention was attracted by the appearance of factors which characterized the subsequent early Yayoi earthenware in eastern Japan, such as the formation of various large urns. We have also confirmed that the practice of tooth extraction had something in common with the earthenware. While the tooth extraction style in Negoya followed the principle of the final Jōmon period of the Kantō and South Tōhoku Districts, the process of tooth extraction changed under the influence of the Tōkai District.

It has been proved that rice cultivation started in the Chūbu district before this time. Against this background of dramatic cultural changes, such as the establishment of reburial graves mainly using large funerary urns and changes in conventional

tooth extraction based on the western Japanese style, I thought it necessary to examine the influence of foreign culture which brought about a revolution in life style and is already recognized at the Negoya site.